What is Rotary？

～ Guy Gundaker から学ぶロータリー ～

（改訂５版）

本書は、Guy Gundaker の著作『A Talking Knowledge of Rotary』（1916 年）の翻訳ではなく、また解説でもなく、あくまで『A Talking Knowledge of Rotary』に刻まれた“Guy Gundaker のロータリー観”の解説です。具体的には、『A Talking Knowledge of Rotary』の内容を私なりに整理して分かり易く紹介した上で、「Guy Gundaker の今日的意義」についても述べました。もちろん、“Guy Gundaker のロータリー観”は現代にも通じる、かつ今後にも大いに活かすべきであるという思いから、Guy Gundaker に成り代わって私心なく真摯に解説したつもりです。

本書を読んでくださったロータリアンにおかれましては、Guy Gundaker の大ファンになっていただき、ロータリーを今まで以上に大好きになってくだされば、私にとって望外の喜びです。

改定５版の発行にあたり　鈴木一作

＜目 次＞

はじめに ・・・

４．Guy Gundaker の今日的意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
【１】「ロータリーの目的」と Guy Gundaker
【２】「職業奉仕」と Guy Gundaker
【３】「クラブ奉仕」と Guy Gundaker
【４】「会員増強」と Guy Gundaker
【５】「現代のロータリー」と Guy Gundaker

５．What is Rotary ？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

附記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
附記１ ロータリーのクラブ運営（総論：心得と役割）
① 役員と理事
② 委員会
③ クラブ会長
④ クラブ幹事
附記２ ロータリーのクラブ運営（寒河江ＲＣでの実践）

おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

参考コラム
参考１：決議 23-34 の ６）と Guy Gundaker ・・・・・・・・・・・・・・17
参考２：「Service（奉仕）」の説明で引用されてきた２つの文書 ・・・・・・19
参考３：ロータリーの２つの標語（Motto）と Guy Gundaker ・・・・・・23
参考４：クラブの問題点の具体例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
参考５：会長挨拶（会長スピーチ）の心得・・・・・・・・・・・・・・・・・30
参考６：新入会員を紹介する例会で話して欲しいクラブ会長の言葉・・・・・37
参考７：職業奉仕の森・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
参考８：ＤＥＩと Toleration・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

Courtesy of the Library of Congress, Prints & Photographs Division, photograph by Harris & Ewing

ROTARY, ROTARIAN, SERVICE ABOVE SELF, MASTERBRAND SIGNATURE and MARK OF EXCELLENCE are registered trademarks of Rotary International. Rotary International was not involved with the publication of this book and the views expressed in this book do not reflect the views and opinions of Rotary International.

はじめに

ロータリーは創立して 100 年余り、変革と発展の歴史だったと言ってよいでしょう。21 世紀に入ってからは、世界はグローバル化と高度な情報社会がますます進んできた一方、テロや紛争に加え、自然災害、環境破壊、ポピュリズム、格差社会などの問題が噴出してきました。そこに、新型コロナウイルス禍が世界規模で起こったのです。そうした中、ロータリーの方向性や役割についても変革がさらに求められ、奉仕プロジェクトの手法やクラブ例会の在り方なども変わってきたように思います。

しかし、我々ロータリアンは、そういう状況でも、いや、そういう状況だからこそ、100 年以上経過した今でも燦然と輝き続ける「ロータリーの普遍の価値」や「ロータリアンとしての在るべき姿」を忘れてはなりません。実際、新たな道や変革を追い求めるあまり、起業時の設立理念、社是や社訓などを疎かにした経営に転じ、結局は消滅していった老舗名門店や有名企業は数知れないではありませんか。

もちろん、ロータリーにも時代に応じた新たな変革は必要です。しかし、その変革のために、ロータリーの価値やロータリアンとしての矜持が失われるようでは、もはやロータリーではなくなってしまいます。だからこそ、変革の準備やスピード、内容などについて、責任ある適切な検討と決定までの確かな道筋が重要なのです。

1916 年に発行され、当時のロータリーにおけるクラブ運営の教科書となった Guy Gundaker 著作『A Talking Knowledge of Rotary』は、その後のロータリー発展の礎になったと言ってもよいでしょう。実際、今でも世界中のクラブの例会運営は、Guy の考え方が基本です。また、現在の『ロータリーの目的』の冒頭の文および第２と第３の内容は、“Guy Gundaker のロータリー観”そのものです。著名なロータリアンが書物や講演などで述べてきたロータリーの解説にしても、大部分は Guy のロータリー観に準じた内容なのです。

しかし、最近では Guy Gundaker の功績はおろか、名前すら知らないロータリアンが世界中に大勢います。それは、ロータリーの歴史や伝統、普遍の価値を学び合う機会が少なくなってきたからではないでしょうか。だからこそ今、私は敢えて「What is Rotary？」をロータリアン一人一人に問いたいのです。すなわち、100 年を超えるロータリーの価値ある歴史を踏まえ、かつ 21 世紀におけるロータリーの変革と発展を見据えた上での「What is Rotary？」です。なぜなら、この問いに対する回答をロータリアン一人一人が持たなければ、我々は道しるべを失った迷えるロータリアンとなってしまうからです。

『A Talking Knowledge of Rotary』の邦訳本は、私が敬愛してやまない３人のロータリアン（小堀憲助、田中毅、三木明）が既に世に出しています。どれも名著ですが、以前から私は「邦訳本だけでなく、解説書も必要ではないか」と思っていました。すなわち、Guy Gundaker を知らない、そしてロータリーの歴史や伝統にあまり詳しくないロータリアンにも理解しやすい『A Talking Knowledge of Rotary』の解説書です。

その解説書として、2020 年７月、『Guy Gundaker から学ぶロータリー　～ A Talking Knowledge of Rotary の世界～』を編集発行したところ、嬉しいことに、その内容を『ロータリーの友』の「ガイ散策」（2021 年７月号～2022 年６月号）に執筆連載する機会をいただきました。そのおかげで、全国の諸先輩から賛辞のお言葉や珠玉のご意見を多数いただいております。その中に、「むしろ“Guy Gundaker のロータリー観”そのものを解説し、それを世界に発信したらどうか」という意見が少なからずありました。

そこで今回、『A Talking Knowledge of Rotary』の解説書ではなく、“Guy Gundaker のロータリー観”の解説書として新たに編集し直した改訂版を、日本語版と英語版で発行した次第です。特に、世界中のロータリアンに“Guy Gundaker のロータリー観”を知っていただくとともに、それを 21 世紀のロータリーに「どう活かすべきか」、そして「どう活かせるか」ということを主眼に置いて解説することに努めました。もちろん、あなたにとっての「What is Rotary？」のヒントを見つけることもできるでしょう。

最初に、本解説書を読むにあたり知っておいて欲しいこと、すなわち『A Talking Knowledge of Rotary』の概略、そしてGuy Gundakerの人物像について紹介いたします。

● A Talking Knowledge of Rotaryの編集発行

Guy Gundaker

『A Talking Knowledge of Rotary』は、ロータリー誌「The Rotarian」の1916年4月号、5月号、6月号、7月号に掲載されたGuy Gundakerの記事「Educational Pamphlets for Rotarians（pamphlets No１－No４）」に基づいて、国際ロータリークラブ連合会のCommittee on Philosophy and Education（理論・教育委員会 ＜委員長：Guy Gundaker＞）によって編集発行された32ページから成る小冊子です。そして、その内容は、

当時の「ロータリーの奉仕概念、クラブ運営の在り方、ロータリアンの義務」を体系化したもので、史上初めてのロータリーの教科書

だったのです。

また、その小冊子には、1915年7月の米国カルフォルニア州サンフランシスコ国際大会で採択された

全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓 ：通称『道徳律（職業論理訓）』

（The Rotary Code of Ethics for Business Men of All Lines）

の全文も掲載されており、『道徳律（職業倫理訓）』の普及にも大いに貢献したと言えるでしょう。

さらに、その小冊子は1916年７月の米国オハイオ州シンシナティ国際大会で、

ロータリーのクラブ運営のテキスト

として採択され、その後の普及にも弾みがつきました。驚いたことに、以上のような出来事は、なんと第一次世界大戦（1914～1918年）の最中に起きているのです。

● Guy Gundakerの経歴

Guy Gundaker（1873～1960）は米国フィラデルフィア・クラブの創立会員の一人で、職業分類はレストラン経営。出身はペンシルバニア州で、コーネル大学、ペンシルバニア州立大学法学部を卒業し、1902年に弁護士登録をしています。その後、Guyはレストラン経営に身を転じ、全米レストラン協会を結成して「レストラン協会の道徳律（職業倫理訓）」を作ったことでも知られています。また、ロータリーの創立者Paul Percy Harris（1868～1947）の親しい友人でもありました。

実は、Guy Gundakerは1923-24年度の国際ロータリー（Rotary International：ＲＩ）会長で、日本のロータリアンが重要視している『決議23-34』の採択時（1923年６月）は、ＲＩ会長エレクトでした。しかも、その決議には、『A Talking Knowledge of Rotary』の内容が色濃く反映されているのです。

● Guy Gundakerと日本との関わり

1923年９月に日本で起きた関東大震災では、ＲＩからGuy Gundaker会長の見舞い電報とともに２万５千ドル、さらに世界中のロータリークラブからも多額の義援金が送られてきました。当時、日本はロータリークラブができたばかりで、東京ＲＣ（1920年創立）と大阪ＲＣ（1922年創立）の２つしかありませんでした。それだけに、当時の日本のロータリアンは驚きと感謝の気持ちでいっぱいだったことでしょう。東京ＲＣは、その義援金を罹災者救護、小学校再建、孤児院の新築寄贈（ロータリー・ホーム）などに使いました。まさにロータリーのインパクトを高め、公共イメージ向上にも役立ったのです。そして1925年、東京ＲＣは感謝報恩の気持ちを込めて、米国で起きた竜巻被害者へ２万５千ドルの援助金を送っています。

こうしたことで、日本ではロータリークラブ拡大に弾みがつきました。1924 年以降、神戸、名古屋、京都、横浜、京城（ソウル）にもクラブができて、1928 年には７つのクラブで第 70 区になりました。その後、満州の大連や奉天にもクラブができて、1929 年、京都で最初の地区大会が開催されたのです。

もう一つ忘れてならないのは、日本のロータリアンの Guy Gundaker に対する尊敬と感謝の念でしょう。それは、日本でロータリーを学ぶための教科書として使われた本が『A Talking Knowledge of Rotary』であったことにも表れています。“Guy Gundaker のロータリー観”が日本のロータリアンの心に根づき、かつ受け継がれてきたのは、内容の素晴らしさに加えて、以上のような事情もあったのです。それだけに、日本のロータリーにとっては、とても縁の深い人物と言えるでしょう。

1930 年、Guy Gundaker は夫妻で来日しています。東京 RC をはじめ、日本中のロータリアンから温かく迎えられたことは言うまでもありません。

● Guy Gundaker が考えるロータリー

“Guy Gundaker のロータリー観”は多岐にわたりますが、重要なポイントは以下の通りです。

＜Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」＞

ロータリーとは、
ロータリークラブにおいては**「親睦と学びの場」**であり、
ロータリアンにおいては**「人間性の向上」**をもたらすものであり、
仕事においては**「事業と業界の発展向上」**に繋げるべきものであり、
世間においては**「世の中を良くしていく向上運動」**であり、
究極の目的は**「素晴らしい真のロータリアン」**を育てること
（Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians）
である。

＜Guy Gundaker が考える「ロータリーのクラブ運営」＞

ロータリークラブは、
ロータリアンの**「親睦、学び、成長、奉仕」**を主体とした
クラブ運営を行わなくてはならない（Grow Rotarians & Enjoy Rotary）。
それによって、「素晴らしい真のロータリアン」が育ち、世の中が良くなり、
ロータリーが発展していくのである（Grow Rotary）。
つまり、**ロータリーは、「素晴らしい真のロータリアン」を育成し、支援する団体**である。

本書では、以上の内容を詳しく解説していきます。言うまでもなく、これらは現代においても「ロータリーの在るべき姿」として重要であり、今後も強調していかなくてはならないことばかりです。

“ 世界中のロータリアンに、
21 世紀のロータリーの在り方を考える
ヒントになればという願いを込めて ”

鈴木 一作

１．Guy Gundaker のロータリー観

【１】ロータリークラブの特徴 ～～～

要するに、

“素晴らしい真のロータリアン”を育てれば、彼らの活躍（奉仕）によって世の中は良くなる

というのが、Guy Gundaker の考えです。

ちなみに、Guy が述べた「ロータリークラブの教育的性格」は、以下のような言葉とともに、その後のロータリーに綿々と受け継がれていきました。

＜ロータリークラブの教育的性格を表す言葉＞

- **Enter to learn, go forth to serve.**（入りて学び、出でて奉仕せよ）
  1947-48年度ＲＩ会長 Samuel Kendrick Guernsey の言葉
- **Rotary is maker of friendships and builder of men.**（ロータリーは友情を作り、人を作る）
  1954-55年度ＲＩ会長 Herbert John Taylor（四つのテストの創始者）の言葉
- **Rotary's first job is to build men.**（ロータリーの第一の仕事は、人作り である）
  1974-75年度ＲＩ会長 William R Robbins の言葉

ここで、私は皆様に考えて欲しいのです。

職業人や社会人のリーダーで、周囲からの評判も良く、奉仕する意欲がある成人（→ P6参照）なら、

- ロータリークラブに入会しただけで、“素晴らしい真のロータリアン”と言えるのか？
- 入会後、ロータリーの様々な奉仕プロジェクトにお金と汗を出してさえいれば、“素晴らしい真のロータリアン”と言えるのか？

もちろん、そうではありません。Guy Gundaker が考える“素晴らしい真のロータリアン”となるためには、クラブ入会後、次のような行動が必要です。

＜素晴らしい真のロータリアン＞

“素晴らしい真のロータリアン”とは、人間性の向上というロータリーでの成長を通じて、事業、業界、そして社会の向上に貢献する人である。具体的には、
親睦と学びの場である例会に必ず出席し、
ロータリーの歴史や伝統、価値や奉仕理念を学び、
職業観や人生観を深め、奉仕の意欲を高め、奉仕の心を磨き、
事業経営、業界、社会に対する見識を広め、かつ向上発展に努め、
何より寛容な心でロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め合いながら、
自らの使命として世の中に貢献していくロータリアンである。

最近のロータリーでは、「教育的性格」は少し軽視されているような気がします。しかし、“素晴らしい真のロータリアン”を育てることを疎かにすれば、ロータリーは「地域のリーダーを集めただけの単なる慈善団体」に過ぎなくなり、ロータリーの成長発展（Grow Rotary）は望めないのではないでしょうか。それだけに、

現代のロータリーにおいても、「教育的性格」は重要な特徴

でなくてはなりません。

ここで、「ロータリークラブの教育的性格」についてまとめておきます。

＊ ロータリーの究極の目的は、“素晴らしい真のロータリアン”を育てることである。
＊“素晴らしい真のロータリアン”が増えれば、彼らの活躍（奉仕）によって世の中は良くなる。
＊“素晴らしい真のロータリアン”を育てることを疎かにすれば、「Grow Rotary」は望めない。

【2】ロータリーの親睦 ～～～

次に、ロータリーの親睦（fellowship）を育む『場』、すなわち、

ロータリーの志を共にする仲間意識を強め高め合う『場』

について考えてみましょう。もちろん、そういう『場』としては、ロータリーの例会を真っ先に挙げなくてはなりません。他にも近隣クラブとの合同例会、IM、PETS、地区研修・協議会、ロータリー研究会、GNTS、GETS、国際協議会、国際大会なども当てはまります。また、「ロータリーの目的」の唱和、「ロータリーソング」の合唱、奉仕プロジェクトなどの委員会活動、飲食を伴うロータリーの懇親の席なども、親睦を育む『場』に含まれると言ってよいでしょう。要するに、

「親睦を育む場とは、ロータリアンが出会い集う場の全て」

なのです。

大切なことは、そういう『場』を通して、ロータリアン同士が「acquaintance」から「friendship」へ、「friendship」から「fellowship」へと親交の度合いを深めていくことです。そして「fellowship」をますます高め合っていくことで、「親睦」という土壌が醸成され、ロータリーという苗木が成長し、価値ある奉仕へと繋がっていくのです。

なお、Guy Gundaker 自身は述べていませんが、ロータリーの創始者 Paul Percy Harris は、親睦における「Toleration（寛容、尊重、受容、我慢）」の大切さを強調しています。この「Toleration」は、現代のＲＩが推奨しているＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）にも通じるものです。なぜなら、ＤＥＩが実現するためには「Toleration」が不可欠だからです。それだけに、

ＤＥＩは、「Toleration（寛容、尊重、受容、我慢）」を大いに発揮すべき戦略的対象分野である

と言い換えてもよいでしょう。（→ P54, 56 参照）

● ロータリーの親睦と学び

さらに Guy Gundaker は、「親睦」が栄養に満ちた土壌になるには「学び」が必要であるとして、

ロータリアンが出会い集う場の全て（特に例会）は、「ロータリーの親睦」を育む場であると同時に、「ロータリーの学び」を深める場でなければならない

と強調しています。なぜなら、Guy は

「親睦の中で学びを深め、学びを通して親睦を育む」という相互作用こそ、奉仕の意欲と実践に満ちた“素晴らしい真のロータリアン”を育てるための最良の方法である

と考えていたからです。

要するに、

ロータリーの「親睦」と「学び」が一体であればこそ、“素晴らしい真のロータリアン”が育つ

ということです。そして、これこそが『ロータリーの基盤』となるのです。（→ P41 参照）

> **＜ロータリーの基盤（The base of Rotary）＞**
>
> ロータリーの「親睦」と「学び」とは、ロータリーの志を共にし、それを強め高め合いながら、“素晴らしい真のロータリアン”になるために精進し合うことである。すなわち、ロータリーの「親睦」と「学び」は一体であり、それこそが『ロータリーの基盤』である。

ここまで述べてきた内容は、

「ロータリークラブは、親睦、学び、成長、奉仕を主体としたクラブ運営を行わなくてはならない（Grow Rotarians & Enjoy Rotary）。それによって、“素晴らしい真のロータリアン”が育ち、世の中が良くなり、ロータリーが発展していくのである（Grow Rotary）。」

という、Guy Gundaker が考えていたクラブ運営の根幹に繋がるものです。（→ P5, 24, 60 参照）

● ロータリーの親睦に必要なもの

Guy Gundaker は、良き親睦を作り出すものとして、以下の内容を記しています。

＜ロータリーの良き親睦を作り出すもの＞

1．心のこもった握手
2．姓ではなく、名前で呼び合うこと
3．歌の合唱を行うこと
4．その人らしいウィットやユーモアに富む言動
5．会員間の思いやり、親切な行為
6．司会者、クラブ会員、招待者などに対する礼儀正しさ
7．成熟した実業家たるロータリアンに相応しい紳士的振舞いと思慮深さ
　・ロータリーの例会では、決して酒の勢いを借りて議論してはならない。
　・ロータリーの例会では、発言者は無意味な冗談を言ってはならない。

上記の１～４は米国らしさを感じさせますが、５～７は万国共通の必須事項と言ってもよいでしょう。私としては、上記５～７で言及している内容に関連して、

「ロータリアンは、他人の悪口や陰口を言ってはならない」

ということを強調しておきたいと思います。

もちろん、意見を言うのは結構です。しかし、他人の悪口や陰口を言っては駄目です。そういう人は、ロータリーでは例外なく嫌われ、疎んじられ、やがては軽蔑されていくからです。例えば、それが社会的に地位や役職の高い人だったら、周囲には「面従腹背」の者しかいなくなります。しかも、それがロータリアンだったら、ロータリーの「親睦」を台無しにする人物と言ってもよいでしょう。当然、上記５～７の精神に違反しますし、周囲から信頼され、尊敬される“素晴らしい真のロータリアン”になれるはずがありません。

これまで私は、信頼と尊敬に値する“素晴らしい真のロータリアン”にたくさん出会いました。もちろん、経歴や考え方、性格などは人それぞれです。しかし、共通点が１つだけあります。それは、

「意見は言っても、他人の悪口や陰口は決して言わないロータリアン」

です。これは、現在の『ロータリアンの行動規範』にある

「4） ロータリーやほかのロータリアンの評判を落とすような言動は避ける」

にも通じることです。

● まとめ

＜ロータリーの親睦（fellowship）＞

ロータリーでは、ロータリアンが出会い集う全ての場を通じて、
ロータリーを学び合いながら、ロータリアン同士の交友を
“acquaintance”（知り合い程度の交友）
→ “friendship”（親しい者同士の友情）
→ “fellowship”（ロータリーの志を共にする仲間意識）
へと深めていくことによって、“親睦”という土壌が醸成されていく。

要するに、ロータリーの親睦と学びが一体であればこそ栄養に満ちた土壌となり、そのおかげでロータリーの苗木が立派に成長していくのである。

その場合、ロータリアン同士が**“寛容（Toleration）”**の精神を持っていなければならない。

【3】ロータリークラブの構成と目的 ～～～

【4】ロータリーの基本と応用 ～～～

さて、ここからは、上記『ロータリーの基本』の第１、第２、そして『ロータリーの応用』の第３、第４の順に解説していきます。一緒に、“Guy Gundaker のロータリー観”を考えていきましょう。

１）ロータリーの基本：会員一人一人の向上

最初の「会員一人一人の向上」について Guy Gundaker が自ら説明した内容は、以下の＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞に記された１）～５）の５項目だけしかありません。その５項目だけで、全てが言い尽くされているということですね。

＜ロータリーの基本と応用＞
- ロータリーの基本 ＝ クラブ・リーダーの義務（クラブ運営）
  - **第１．会員一人一人の向上**
    - **＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞**
      - **１）会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること**
      - **２）会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること**
      - **３）奉仕の心を涵養せしめること**
      - **４）自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること**
      - **５）優れた社会的指導者に育てること**
  - 第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
- ロータリーの応用 ＝ クラブ会員の義務（Rotary - at - Work）
  - 第３．会員の業界全体の向上
  - 第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

この＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞の５項目は、まさに「Grow Rotarians」そのものであり、クラブ運営、特に例会の充実にかかっています。（→ P24, 28 参照）

上記５項目を現代流に言い換えると、次のようになるでしょう。

① 会員同士の「交流の時間」（懇談、意見交換、情報交換、討論など）および感動的な「会員スピーチ」（事業経営、職業観、生き方など、見識が広がるスピーチ）
② 会員の「多様な学びと意欲喚起」
③ 会員の「奉仕の心の醸成」
④ 会員の「成長発展」
⑤ 会員の「リーダーシップの育成」

上記①～⑤の５項目は、現代のロータリーにおいても、「ロータリークラブの在るべき姿」として最も大切にするべきものであり、それらが疎かになるとロータリーは魅力を失い、存在価値すら危うくなるのではないでしょうか。言うまでもなく

「クラブ会長の最大の義務は、魅力的で価値ある例会の開催」（→ P28 参照）

なのです。

ここで私は、クラブ会長の皆さんに確認しておきたい。
あなたのクラブでは、

＊ この5項目が十分に意識され、かつ満たされている例会が行われていますか？
＊ この５項目は、ロータリークラブが会員に対して果たすべき義務であると認識していますか?
＊ 新入会員は、「さすがは、ロータリーの例会だ」と言って、例会の内容に感動していますか？

2）ロータリーの基本：会員の事業の向上

Guy Gundaker は、このテーマを ＜現実面＞ と ＜理想面＞ の２つに分けて説明しています。

＜ロータリーの基本と応用＞

● ロータリーの基本 ＝ クラブ・リーダーの義務（クラブ運営）

第1．会員一人一人の向上

第2．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

＜現実面＞

ロータリー活動を通して、会員間に友情に満ちた信頼が生まれ、取引増加の機会が与えられる。

（但し、与えられるものは、取引増加の「機会」だけである）

＜理想面＞

ロータリー活動を通して、事業における高い倫理基準と正しい経営方法が体得できる。その上で、個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本であり、かつ職業倫理全般にも通じる「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を学び、実践することで、自己の事業が向上発展する。

● ロータリーの応用 ＝ クラブ会員の義務（Rotary - at - Work）

第3．会員の業界全体の向上

第4．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

前半の ＜現実面＞ に書かれている内容は、

“ロータリークラブに入会しても、すぐに商取引が増えることはありません。しかし、入会後、普段のロータリー活動を通じて「信頼」や「人柄」が他の会員から認められるようになれば、やがて商取引増加の機会に恵まれたロータリーを活かせるようになり、自己の事業の向上や発展にも繋がるでしょう。”（→ P33 参照）

というように理解すればよいでしょう。これは、新入会員には必ず説明してあげてください。

また、上記の ＜現実面＞ の最後に記されている

“但し、与えられるものは、商取引増加の「機会」だけである”

について、Guy Gundaker は

“ロータリアン同士の商取引は、ロータリーの義務ではない。ロータリーの本質でもない。ロータリーの存在理由でもない。あくまで商取引増加の「機会」があるというだけで、ロータリーにおいては、ロータリアン同士の商取引は単なる付随的な要素に過ぎない。”

と説明しています。要するに、Guy は

ロータリー創立当初の目的の１つであった「実業互恵」からの脱却

を求めているということです。

一方、後半に記されている ＜理想面＞ については、

“ロータリークラブは、クラブ会員に「事業推進に必要な倫理および経営方法」と「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を身につけさせる義務がある。そして、それらを会員が個人生活、事業生活、社会生活の中で実践すれば、やがて事業は向上発展する。”

というように理解すればよいでしょう。

なお、「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」については、後述します。（→ P19, 45-47参照）

いずれにしても、ロータリーにおける「会員の事業の向上」を、現実面と理想面に分けて述べた Guy Gundaker の見識には脱帽です。こうした考え方は、ロータリー創立後100 年以上たった今でも生きているように思います。

但し、Guy Gundakerには申し訳ないのですが、私自身は

“「会員の事業の向上」は、現実面と理想面に分けて考える必要はない。ロータリーの親睦と学びは一体である以上、現実面と理想面も一体のはずである。”

と考えています。これについては後述します。（→ P33-35参照）

3）ロータリーの応用：会員の業界全体の向上

ここからは、クラブ会員の義務である〖ロータリーの応用〗について解説します。最初に、「会員の業界全体の向上」についてです。

＜ロータリーの基本と応用＞

● ロータリーの基本 ＝ クラブ・リーダーの義務（クラブ運営）

第1．会員一人一人の向上

第2．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

● ロータリーの応用 ＝ クラブ会員の義務（Rotary - at - Work）

第3．会員の業界全体の向上

ロータリアンは、ロータリークラブから選ばれて、各々の業界に派遣された代表である。したがって、ロータリアンは各々の業界で職業倫理と奉仕を普及させる義務があり、それによって業界全体が向上発展していく。

第4．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

Guy Gundaker は、

「ロータリアンは、ロータリーから各々の業界に派遣された代表者（大使）である以上、他の同業者に働きかけながら、業界における職業倫理と奉仕の普及に努めるべきである」

と述べた上で、

「ロータリアンは、業界全体を向上発展させていくという認識と義務を忘れてはならない」

と強調しています。要するに、職業人たるロータリアンの「矜持」ですね。（→ P11, 34, 42参照）

上記の内容は、以前ならクラブのベテラン会員がよく口にされていた言葉ですから、多少の経験年数のあるロータリアンなら聞いたことがあるでしょう。

実は、この「第3．会員の業界の向上」について、Guy Gundaker は

“This is Rotary’s greatest opportunity for service.”

と述べているのです。すなわち、

「会員の業界全体の向上をもたらすことは、ロータリーにとって最大の奉仕の機会である」

という意味です。業界の向上は社会の向上発展に繋がりますから、職業人たるロータリアンなら当然の奉仕であり、社会貢献という意味でも実に重要な奉仕であるということですね。

このように、会員の業界全体の向上を重視していたのは、当時のロータリーの大きな特徴と言ってよいでしょう。もちろん、現代においても重要なことだと思います。（→ P34, 42参照）

4）ロータリーの応用：会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

次に、もう一つのクラブ会員の義務である、上記の内容について解説します。

＜ロータリーの基本と応用＞

● ロータリーの基本 ＝ クラブ・リーダーの義務（クラブ運営）

第1．会員一人一人の向上

第2．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

● ロータリーの応用 ＝ クラブ会員の義務（Rotary - at - Work）

第3．会員の業界全体の向上

第4．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

ロータリーの世界は、会員をより良い市民、より良い商工会議所の会員、より良い国民となるように 訓練する ものである。それによって、市民生活と慈善行為の両面が実りあるものとなり、会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体が向上していく。

この「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」については、

「ロータリーでより良い人間に成長すれば（＝訓練）、より実りある生活、より心のこもった交流や奉仕ができるようになり、それによって皆が幸せになり、社会全体も良くなっていく」

という理解でよいと思います。（→ P11, 35, 43 参照）

Guy Gundaker は、上記の「市民生活と慈善行為の両面が実りあるもの」となる活動について、次のような説明をしています。

① 一般的には、市民生活に対するロータリアンの関心は、ロータリークラブとしての活動より、むしろ個人として、または商工会議所の会員としての活動に結びつけるべきである。

② 社会奉仕のためにロータリークラブが団体行動をするのは、特別な場合ならよい。但し、事前に慎重な配慮が必要である。特に、ロータリークラブとしての活動が、どの町にもあるような専門事業団体の活動と重複するものであってはならない。

①と②をまとめれば、

“市民生活に関わる社会奉仕事業については、他の団体の活動と重複しないように配慮しながら、必要ならロータリークラブとして団体行動をしてもよい。しかし、本来は、ロータリアン個人としての奉仕活動として行うべきである。”

ということです。なお、現在のロータリーでは、他の団体の活動との重複や協力についても、特に制限はされていないので留意してください。

ところで、上記の①と②の内容は、1923年に採択された『決議23-34』の 6）、すなわち「社会奉仕活動の選択指針」と類似していることにお気づきになられたでしょうか。

『決議 23-34』は、「職業奉仕・個人奉仕の推進派」と「社会奉仕・団体奉仕の推進派」との妥協の産物だったとも言われています。妥協の産物とは、特に『決議 23-34』の 6）を指しているのですが、実際には7年も前の 1916 年に、Guy Gundaker が『A Talking Knowledge of Rotary』の中で既に提示していた内容だったのです。

参考１：決議 23-34 の 6）と Guy Gundaker

＜決議23-34 の 6）＞「社会奉仕活動の選択指針」

個々のロータリークラブの社会奉仕活動の選択を律する規定は別に設けられていないが、これに関する指針として以下の準則が推奨されている。

a）ロータリーの会員の数には限りがあるので、ロータリークラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲の社会奉仕活動は、他に地域社会全体のために発言し、行動する適切な市民団体などの存在しない土地の場合に限り、これを行うこととすべきであり、商工会議所のある土地では、ロータリークラブはその仕事の邪魔をしたり、横取りをしたりすることのないようにしなければならない。しかし、ロータリアンとしては、奉仕を誓い、その理念の教えを受けた個人として、その土地の商工会議所の会員となって活動すべきであり、また、その土地の市民として、他の善良な市民と一緒に、広くすべての社会奉仕活動に関与し、その能力の許す限り、金銭や仕事の上でその分を果たすべきである。

b）一般的に言って、ロータリークラブは、どんな立派な事業であっても、クラブがその遂行に対する責任の全部または一部を負う用意と意思のない限り、その後援をしてはならない。

c）ロータリークラブが奉仕活動を選ぶ場合に宣伝をその主たる目標としてはならないが、ロータリーの影響力を拡大する一つの方法として、クラブが立派に遂行した有益な事業については正しい広報が行われるべきである。

d）ロータリークラブは、仕事の重複を避けるようにする必要があり、総じて、他に機関があり、それによって既に立派に行われている事業に乗り出すようなことをしてはならない。

e）ロータリークラブの奉仕活動は、なるべく現存の機関に協力する形で行うことが望ましいが、現存機関の設備や能力が目的の遂行に不十分である場合には、必要に応じ、新たに機関を設けることにしても差し支えない。ロータリークラブとしては、新たに重複した機関をつくるよりも、現存の機関を活用することのほうが望ましい。

f）ロータリークラブはそのすべての活動において、宣伝者として優れた働きをし、多大の成功を収めている。ロータリークラブは地域社会に存在する問題を見つけ出すことはしても、それがその地域社会全体の責任にかかわるものである場合には、単独でそれに手を下すようなことはしないで、他の人々にその解決の必要を悟らせる努力をし、地域社会全体にその責任を自覚させて、この仕事がロータリーだけの責任にならないで、本来その責任のある地域社会全体の仕事になるようにしている。また、ロータリーは、事業を始めたり、指導したりするが、一方、当然それに関心をもっていると考えられるほかのすべての団体の協力を得るように努力すべきであり、そして、当然ロータリークラブに帰すべき功績であっても、それに対する自分のほうの力を最小限度に評価して、そのすべてを協力者の手柄にするようにしなければならない。

g）クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するもののほうがロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである。

（下線部が類似する内容）

『決議 23-34』の採択当時（1923 年６月）、Guy Gundaker は ＲＩ会長エレクトでした。もちろん、翌７月からはＲＩ会長です。そのことを考えれば、Guy Gundaker のロータリー観が『決議 23-34』に色濃く反映されていたことは、不思議ではないでしょう。

【5】ロータリーの奉仕 ～～～

2）Guy Gundaker が考える「奉仕という言葉が意味する“内容”」

Guy Gundaker は、『A Talking Knowledge of Rotary』の中で「Service（奉仕）」という言葉は使っていますが、不思議なことに、その具体的な意味については説明をしていません。

しかし、本解説書を熟読してくださった方は、Guy が「Service（奉仕）」の同義語として状況に応じて使い分けていた言葉が2つあることに気づいたことでしょう。それは、

「向上（Betterment）」と「義務（Duty）」

です。具体的には、「奉仕とは、向上をもたらす行動」とか「奉仕は、ロータリーとロータリアンの義務」などの使い方をしています。少なくとも、“親切”や“思いやり”という意味で使ってはいないのです。

要するに、Guy Gundaker は

奉仕とは、社会全体の様々な場面や状況における「向上や幸福をもたらす行動」であり、
それはロータリーとロータリアンの「義務」である

と考えていたのです。言い換えれば、「向上や幸福をもたらす行動」は“親切”や“思いやり”からではなく、ロータリーとロータリアンの「義務」、すなわち高潔な使命であるということです。Guy Gundaker はこれこそが「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」と考えていたのですが、実は、それが現在の「奉仕の理念（the Ideal of Service）」に繋がっていくのです。（→ P14, 45-47 参照）

参考２：「Service（奉仕）」の説明で引用されてきた２つの文書

これまで著名なロータリアンが「Service（奉仕）」について説明する際、しばしば引用されてきた文書が２つあることをご存じでしょうか。参考までに、以下に紹介いたします。

１つは、1931 年にＲＩが発行した「The Aims and Objects Plan（Pamphlet No.3B）」に記載されているものです。これは、「The Ideal of Service」に関する最初のＲＩ公式声明と言ってもよいでしょう。

> The Ideal of Service は、以下の内容を包含したものである.
> １．「Service Above Self」
> ２．「He Profits Most Who Serves Best」
> ３．「thoughtfulness of others」（他人への思いやり）
> ４．「most of all treating others as one would like to be treated」
> （人からしてもらいたいことなら、何でも人にするのです）

もう１つは、1954 年にＲＩ初代事務総長 Chesley Raynolds Perry が米国 Tulsa RC で述べた内容で、かつて毎年発刊されていた「Official Directory（全世界のロータリークラブの所在地・連絡先が記された公式名簿）」の背表紙の裏に書かれていたものです。

> 世界中どこのロータリークラブでも、他人を思いやり、他人のために尽くすという「奉仕の理念」を大切にしています。
> *（Rotary clubs everywhere have one basic ideal the “Ideal of Service”, which is thoughtfulness of and helpfulness to others.）*

いずれにしても、Guy Gundaker が考えていたロータリーの「Service（奉仕）」は向上と義務であり、上記２つとは意味が異なることに留意してください。

【6】ロータリーの中立性 ～～～

【7】ロータリアンの利益 ～～～

Guy Gundaker は、

“ロータリアンは、親睦と学びと奉仕に邁進しよう！”

と強調しています。そうすれば、

“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”

と世間は称賛してくれるであろうと述べています。もちろん、こうした称賛を受けることも、ロータリアンの『利益』と言ってよいでしょう。

ところで、Guy Gundaker が述べた「ロータリアンの『利益』」ですが、私自身は、“ロータリアンの人生を豊かにするという『利益』”と言い換えてもよいのではないかと思っています。

以下に記した内容は、新入会員との懇親の席などで、私がしばしば語っているものです。

＜ロータリーは、人生を豊かにする（Enjoy Rotary）＞

仕事や経営に緊張と多忙の日々を過ごす中、私はロータリーに入会したおかげで、本来なら出会うことすらなかったであろう立派なロータリアンと知り合い、気を許し合い、奉仕を語り合い、人生を語り合うことができるようになりました。

そのおかげで、多くのロータリアンの職業観や人生観、真摯で誠実な生き方、そして立派な人柄に触れながら、事業上の手続きや成功の道筋、職員管理、自己管理、円満な人間関係の在り方などを学び、それらを自分の事業や人生に活かすことができました。そして、仲間やクラブや地域住民のために、知恵と汗と時間と多少のお金を出し合いながら、様々な価値ある奉仕活動に夢中で取り組んできたのです。

なにより、それらは楽しくて心が満たされた時間であり、安堵と安息と自己肯定感に満たされた時間でもありました。さらに、本来なら経験できなかったであろう成功や飛躍のチャンス、素晴らしい感動にも恵まれました。そうした中、いつしか自分も、価値ある立派な生き方（ロータリーの理想（奉仕という生き方））に精進する人間となっていたのです。

私は、ロータリーのおかげで人間的にも成長させてもらい、人生も豊かにしてもらいました。そういうロータリーだからこそ、ロータリーは発展してきたのではないでしょうか。

上述した「ロータリアンの人生を豊かにしてくれるという『利益』」は、まさに「Enjoy Rotary」と言ってよいでしょう。すなわち、ロータリークラブに入会すればこそ、

- **信頼と敬愛に満ちたロータリアンと仲間になれる喜び**
- **ロータリアン同士で親睦と学びの時間を共有できる喜び**
- **事業発展の喜び**
- **奉仕する喜び**
- **安堵と安息と自己肯定感に満たされる喜び**
- **成功や飛躍のチャンスを得る喜び**
- **感動に恵まれる喜び**
- **価値ある生き方を学び、自分自身が成長する喜び（“素晴らしい真のロータリアン”に成長する喜び）**

を味わうことができるのです。

これらの内容は、“Guy Gundakerのロータリー観”に合致するものです。それだけに、Guy Gundaker が生きていれば、ロータリアンの『利益』とは、

ロータリアンの人生を豊かにしてくれるという『利益』

と言い換えてもよいことに、彼はきっと賛同してくれるでしょう。

参考３：ロータリーの２つの標語（Motto）と Guy Gundaker

Guy Gundaker は「ロータリアンの利益」に関する説明の最後で、

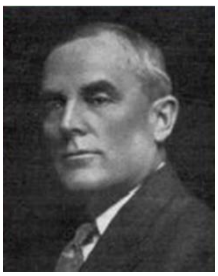
＊ **Service, Not Self**

＊ **He Profits Most Who Serves Best**

という、ロータリーの２つの標語（Motto）を掲げています。どちらも「利益」に関係する内容なので、そこで言及したのでしょう。

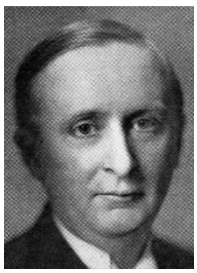
（なお、現在のロータリーの標語は、前者については「Service Above Self」に、後者については「One Profits Most Who Serves Best」に変更されています。）

ところが、この２つの標語について、Guy Gundaker は説明や意見を述べてはいないのです。ここでは、それらの標語と Guy Gundaker の考え方について説明いたします。



先ず「Service, Not Self」ですが、これは 1911 年のポートランド国際大会で、ミネアポリス RC 会長だった Benjamin Frank Collins が述べた言葉です。その解釈については、かつては「自己の利益を度外視した奉仕（無私の奉仕、自己滅却の奉仕）」とか「社会奉仕の真髄を指す言葉」とか言われていました。しかし、実際には「自分達だけ（ロータリアン同士）で商取引するのではなく、ロータリアン以外の人とも積極的に商取引をした方が、クラブも地域も繁栄する」というのが正しい意味です。（出典：The National Rotarian 1911 年 11 月号「How It is Done in Minneapolis」 An Impromptu Adress Given at the Portland Convention）

一方、Guy Gundaker は、ロータリアンとしての活動から得られる『利益』は、ロータリアン自身に属するもの（Self）であることを強調しています。すなわち、ロータリアンの『利益』とは「より立派で、より大きな人間となること」であり、かつ「より素晴らしい奉仕を提供できる人間となること」であるとして、Guy は「人間性の向上」（Self）という『利益』を謳っているのです。いずれにしても、“Guy Gundaker のロータリー観”には、Collins の「Service, Not Self」という考え方は含まれていないように思います。



次に「He Profits Most Who Serves Best」ですが、これはシカゴ RC の Arthur Frederick Sheldon の言葉です。邦訳は「最も多く奉仕する者、最も多く報われる」です。そもそも、Sheldon の奉仕理論は「自らの事業を継続的に発展させるための学問的な企業経営の理念と実践方法」であって、あくまで「事業経営上の利益」を重視しています。もちろん、事業生活だけではなく、実生活上の利益についても述べていますが、それらは成功、尊敬、自尊心です。

一方、Guy Gundaker は、上述したように「人間性の向上」（Self）という『利益』を強く謳っています。しかも、それは「商品の生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない」とまで言っているのです。

いずれにしても、“Guy Gundaker のロータリー観”は、ロータリーの２つの標語（Motto）とは合致していない、あるいは相容れないように思います。Guy Gundaker は２つの標語を掲げたものの、説明や意見を述べていない理由は、この辺りにあるのかも知れません。

2．ロータリークラブ、かくあるべし

Guy Gundaker が「ロータリークラブ、かくあるべし」と考えていた内容は、言うまでもなく

「人間性の向上というロータリーでの成長を通じて、事業、業界、そして社会の向上に貢献する“素晴らしい真のロータリアン”を育てるためのクラブ運営」

であり、以下の「ロータリーの基本」の第１と第２に相当します。すなわち、「会員一人一人の向上」と「会員の事業の向上」をもたらすクラブ運営のことです。（← P12 参照）

＜ロータリーの基本と応用＞

- **ロータリーの基本 ＝ クラブ・リーダーの義務（クラブ運営）**
  - **第１．会員一人一人の向上**
  - **第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）**
- ロータリーの応用（ロータリーの真髄） ＝ クラブ会員の義務（Rotary - at - Work）
  - 第３．会員の業界全体の向上
  - 第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

【１】クラブ運営（親睦、学び、成長、奉仕を主体としたクラブ運営）～～～～～～～～～～

１）クラブ・リーダー

ここで言う「クラブ・リーダー」とはクラブ役員のことですが、クラブ運営という点では、特にクラブ会長の責任が大きいことを、Guy Gundaker は強調しています。実際、

“クラブ運営、特に例会の充実こそが、「ロータリーと社会の発展」に繋がるのである。そして、その責任者はクラブ会長である。”

と述べています。それだけに、クラブ運営の要である

例会、役員会、理事会、委員会活動

の内容について、クラブ会長は明確な方針と戦略を持っていなくてはなりません。

もちろん、クラブ会長の方針や戦略の「根幹」には、

＊ ロータリーは、素晴らしい真のロータリアンを育てる団体である。

＊「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」が、「Grow Rotary」に繋がる。

という２つが必要であることを忘れてはなりません。その上で、

「親睦、学び、成長、奉仕」（→ P5, 60 参照）

を主体としたクラブ運営をどうやっていくか、それを会員増強にどう繋げていくかについて、ＲＩや地区の方針や戦略、そして本解説書も参考にしながら、十分に検討すべきでしょう。

そもそも、ロータリークラブの役職任期は１年です。しかも、ＲＩテーマや地区目標、クラブ目標なども１年単位です。それだけに、クラブ会長は他のクラブ・リーダーの知恵と協力を得ながら、前年度の踏襲ではなく、新年度に相応しいクラブ方針や戦略を新たに考え、実行して欲しいのです。その際、クラブ会長が最も頼りにすべきは、心通じ合うクラブ幹事でしょう。言うまでもなく、クラブの会長と幹事は一蓮托生です。

会長の心意気や頑張りは、誰もが見ています。会員からはもちろん、他のクラブ・リーダーからも

「あなたの会長年度は、本当に充実していて、とても楽しかった」

と言われるような、魅力的で価値ある１年にして欲しいのです。それは、間違いなく会長自身の仕事や人生にも良い影響をもたらします。何より、多くの“素晴らしい真のロータリアン”が育ち、より良い社会に繋がるはずです。

2）クラブの「役員会」と「理事会」

ロータリークラブにおける「役員」とは、クラブ運営の指導的役割を担うクラブ・リーダーです。
一方、「理事」はクラブ運営について話し合い、その議決（多数決）に参加する人のことです。

「役員会」（役員ミーティング）は、クラブの執行機関です。したがって、「理事会」に諮る議案（各委員会の活動計画、予算、決算、新たな提案など）を事前に検討することが大きな役割です。そして、それらの議案を役員会でまとめ、必要な資料と一緒に「理事会」へ提出するのがクラブ幹事の仕事です。

一方、「理事会」はクラブの決議機関（意思決定機関）で、クラブ運営に関する全ての管理責任を担います。主たる役割は、「役員会」から提出された議案を検討し、決議（承認・不承認・各種決定）を行うことです。もちろん、検討の場では活発な議論が必要です。そうした心がけや切磋琢磨が、ロータリーに対する見識を互いに深め合うことにも繋がります。

年度開始前（特に PETS 終了直後）の「役員会」と「理事会」は、例会プログラムの年間スケジュールを計画する上で極めて重要です。なぜなら、

例会プログラムの年間スケジュールは、

① ＲＩの年度テーマ、地区の目標、クラブ会長方針などの実現・達成に、果たして役立つ内容となっているか？

②「Grow Rotarians、Enjoy Rotary、Grow Rotary」に繋がる内容になっているか？（親睦、学び、成長、奉仕の４つの視点を重視した内容になっているか？）

について、十分な検討が必要だからです。

特に、上記①を重視する以上、

「前年度踏襲の例会プログラムは、有り得ない」

ということを、肝に命じて欲しいと思います。

もちろん、例会プログラムを実施するにあたっては、当該例会の前々月および前月の「役員会」と「理事会」も大切です。プログラムの予算や準備、役割分担など、具体的な内容について詳細に審議し、前月までに決定しておかなくてはなりません。

さらに、その例会プログラムの担当理事（委員長）は、事前に会長と幹事と入念な打ち合わせが必要です。この事前打ち合わせが不十分だと、「理事会」の審議がスムーズに進まず、時には紛糾したりするからです。

Guy Gundaker は、こうした「役員会」や「理事会」の審議では、

「クラブ会長は、強力なリーダーシップを大いに発揮する責任がある」

と強調しています。

それだけに、Guy は

「役員や理事が無関心であるからとか、委員が積極的でないからとかを理由に、クラブ会長はこの責任から免れることはできない」

と言っていますし、

「クラブ会員の成長を通してロータリーの目的を実現すること、そして クラブレベルを国際的水準に保つことは、クラブ会長の双肩にかかっている」

とまで述べているのです。

3）ロータリーの新入会員

クラブ運営という点では、新入会員の選考もクラブ理事会の重要な仕事です。Guy Gundaker は、ロータリークラブへの入会を許可する条件として次の６つを挙げています。

＜ロータリークラブ入会を許可する条件＞

① 事業の管理者であること
② 管理経営する事業所が、その業界において指導的立場にあること
③ 人柄が高潔で、誰からも信頼・信用されていて、社交性がある人物
④ 入会後、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物
⑤ 入会後、ロータリアンとしての実践活動を怠らないであろう人物
⑥ 入会後、ロータリーの魅力と価値に共感し、ロータリアンとしての熱意を持ち続ける人物

Guy は、特に④の「ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物」を強調しています。
それだけに、例会欠席者の対応について、

“ロータリー入会後、例会欠席が多い会員に対しては、罷免など、厳しい断固とした措置をとるべきである。それは、欠勤が多い社員を解雇するのと同じことである。”

と述べているのです。その上で、

“出席率が高く、退会しない会員こそ、クラブの大きな財産である。会員の入会・退会が（転職や退職以外の理由で）繰り返されるクラブは、衰退する運命にある。”

と強調しています。まさに、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる言葉です。

私が所属するＲＩ第 2800 地区の伊藤巳規男パストガバナーは、

“素晴らしい真のロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を勧めなさい。要は、会員候補者がロータリアンに相応しい高潔な人であるかどうかを見極めることです。”

が口癖でした。それは、

“ロータリーへ入会する以上、①②は必須です。その上で、③④⑤も確かな人が「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」を満喫できるようになり、⑥も確かな人が素晴らしい真のロータリアンになれるのです。素晴らしい真のロータリアンは「Grow Rotary」に貢献し、ロータリーを退会したいとは思いません。”

という意味だそうです。もちろん私も全く同感ですが、そのためには、言うまでもなく

「魅力的で価値ある例会が常に開催されているクラブ」（→ P28 参照）

であることが大前提です。

現在のロータリークラブ入会資格は、前述のとおり、以前よりも緩和されています。（→ P6 参照）
しかも、最近のＲＩは、

多様性で元気なクラブを！：地域社会の多様な人たちが入会することで、クラブに新鮮な視点とアイデアがもたらされ、クラブの存在感が高まっていく

をスローガンに掲げ、様々な背景を持つ人たちにロータリーを体験してもらうことを推奨しています。
しかし、せっかく入会しても、すぐに退会してしまう会員ばかりでは困ります。それだけにＲＩは、

ＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）

を、日頃のクラブ運営において十分に活かすことを強調しているのです。（→ P9, 54, 56 参照）

但し、クラブ運営でＤＥＩが効果を発揮するには、魅力的で価値ある例会が常に開催されていること、クラブに「Toleration（寛容、尊重、受容、我慢）」の文化があること、そしてロータリアンに相応しい高潔な人に入会してもらうことの３つが必要です。これについては、後述します。（→ P56, 58 参照）

4）クラブの「問題点の発見」と「改善」

Guy Gundaker は、

“ロータリークラブは、クラブや会員の現状を省察し、どうすれば理想的なクラブに発展するかを考えなければならない。”

と述べています。

言い換えれば、

“現状に満足せず、むしろ現状の問題点を見つけ出し、それらを改善していくことは、会員に対するロータリークラブの義務である。ロータリーが掲げる理想を達成するには、こうした不断の努力がクラブ・リーダーに必要である。”

ということです。

21 世紀に入って、クラブ戦略委員会などの重要性が話題になっていますが、

“クラブの「問題点の発見」と「改善」は、クラブ・リーダーの義務である。”

ことを、既に 100 年以上前に、Guy Gundaker は強調していたのです。

参考４：クラブの問題点の具体例

私は、次のような状況が見られた場合、クラブ・リーダーは改善に向けて対応すべきだと思います。

＊ 例会に欠席者が多い。特に、無断欠席者が多い。
＊ スマイルをする会員が少ない。（特に、来訪者やゲスト・スピーチを歓迎するスマイル）
＊ 例会開始前、会場に温かな雰囲気が感じられない。
＊ 会長挨拶（会長スピーチ）が、会員の心に響かない。
＊ 新入会員や来訪者をもてなすために話しかけたり、助言したりする会員が少ない。
＊ 会員が意見を述べる機会が少ない。特に、会員スピーチやクラブ・フォーラムが少ない。
＊ 例会中、マナーを守らない人がいる。（私語、携帯電話のマナーモード切り替えなど）
＊ 他人（特に、クラブ内の会員）の悪口や陰口を言う会員がいる。
＊「ロータリーの目的」を理解できていない会員が多い。（ロータリー研修の機会が少ない）
＊ 例会の開始・進行・終了などの時間が守られていない。
＊ 例会が楽しくない、マンネリ化して退屈である。魅力的で価値ある例会とは言いがたい。
＊ 他クラブの例会運営を知らない会員が多い。（他クラブへメーク・アップする会員が少ない）
＊ 自分のクラブの長所や特徴が、会員の間で共有されていない。
（我がクラブの特長を語らせると、「親睦」と「伝統」としか言えない会員が多い）
＊ ロータリー財団や米山奨学会に寄付する人が少なく、寄付への気運そのものが足らない。
＊ クラブへの入会者が少なく、会員増強に対する気運が足らない。
＊ ロータリアンとしての喜びや誇りを感じることができないまま、退会していく会員がいる。

如何でしょうか。上記の項目について、クラブでアンケート調査（○△×）をしてみるのも良い方法でしょう。問題となるような状況があれば、ぜひクラブの理事会または例会で対応策を話し合ってください。

なお、対応策については、次の解説項目「例会運営」に様々なヒントがあるでしょう。

【2】例会運営（魅力的で価値ある例会）～～～

1）例会欠席者

私自身、せっかくロータリーへ入会したのに１～２年で退会してしまった人に対しては、

「ロータリーの素晴らしさを正しく理解できないうちに辞めてしまい、本当に残念だ」

という気持ちでいっぱいになります。しかも、その退会理由が転勤・転居以外のものだった場合、

＊ 退会者に、「acquaintance（知り合い程度の交友）→ friendship（親しい者同士の友情）→ fellowship（ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識）という流れ」を、クラブとして上手く作ってあげられなかったのではないか？（→ P8-10 参照）

＊ 退会者には居心地が悪く、魅力や価値が感じられない例会が多かったのではないか？

と思ってしまいますし、自分自身の配慮不足を反省することもあります。

実際、そういう人は仕事の多忙を理由に、普段から例会に欠席することが多かったのではないでしょうか。言うまでもなく、ロータリーの親睦を育むのに最も重要な場は例会です。その大事な例会に欠席ばかりしていては、親睦どころか、疎外感すら感じるようになるでしょう。当然、ロータリーの会費も無駄な出費と考えるようになり、結局はクラブ退会に繋がってしまうのも無理はないと思うのです。それだけに、例会に欠席者が増えてきた場合、クラブ会長は重大な危機感を持つべきでしょう。

クラブの会員は、誰もが多忙な中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、どうにか仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う『何か』があるからです。だからこそクラブ会長には、その『何か』について、きちんと提供しているという認識と自負が必要です。その『何か』が十分でない例会であれば、当然、例会の欠席者は増えていくでしょう。

Guy Gundaker は、例会欠席が多い会員には罷免など、厳しい対応を求めています。（→ P26 参照）しかし、私としては、先ずはクラブ会長が

「例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」

という言葉で、普段の例会を省みて欲しいのです。その上で、実際に問題があるとすれば、クラブ理事会で最重要課題として採り上げ、実効性のある対策を検討しなくてはなりません。

2）会長挨拶（会長スピーチ）

例会に欠席者が多い場合、クラブ会長が自分自身に問いかけて欲しいのは、

「心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）を、毎回の例会で行っているか？」

という言葉です。なぜなら、会長にとって

- 会員のロータリアンとしての士気を高めるために、
- 会長に対する信頼と敬愛の念を会員の心に醸成していくために、
- クラブの活性化と一体感をもたらすために、

最大の武器となるのは、心が洗われる「会長挨拶（会長スピーチ）」だからです。しかも、これは会長の特権であるとともに、会長が唯一の実行者であり、かつ唯一の責任者であることを銘記してください。

それだけに、クラブ会長にとって最も大きな仕事は、

「会員の誰もが、“今日も来てよかった”と思うような例会を提供すること」

と言ってもよいでしょう。そのためには、

＊ 心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）

＊ クラブの一体感

＊ 魅力的で価値ある例会プログラム

の３つが重要です。会長は、この３つに半ば命をかける覚悟と使命感を持って欲しいと思います。クラブ活性化の鍵は、まさに「会長の心意気」です。

参考５：会長挨拶（会長スピーチ）の心得

以下に、会長挨拶（会長スピーチ）の心得を提示します。参考にしてください。

＜心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）の心得＞

① 心が洗われるスピーチのテーマ、内容の構成などを、事前に十分考える。
② 話すスピード（１分 300 字を推奨）、抑揚、間、目線、表情、ジェスチャー、
　マイクの角度、マイクまでの距離などに気を配る。
③ 文の最初に「えー」という言葉を使わず、前後の文の繋がりが分かる
　適切な接続語を多用する。
④ 落ち着いて、心をこめて話す。
　「伝えた（話した）」ではなく、「伝わった（理解され、感動をもたらした）」が大切。
⑤ Zoom などを活用したオンライン・スピーチでは、特に顔の表情と視線に気を配る。
⑥ 事前の練習は必須。

（← 国際ロータリー第 2800 地区HP　ロータリーを学ぶ「資料6. 会長スピーチの心得」参照）

３）クラブの一体感

さて、クラブの一体感を醸成していくという意味でも、前述の

＊ 心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）
＊ 魅力的で価値ある例会プログラム

の２つが重要であることは言うまでもありません。

しかし、それだけでは足りません。多くの会員がクラブの一体感を感じるようになるには、

「例会は、親睦と学びの場」

となるようなクラブ運営が不可欠です。それだけに、Guy Gundaker は

「会員同士の交流（懇談、意見交換、情報交換、討論）の中で、ロータリーを語り合うこと」

を強調しています。Guy は、これこそが「ロータリークラブ本来の姿」であると考えていたのです。なぜなら、それはロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合うだけでなく、ロータリーを学び合うことにもなるからです。

だからこそ、Guy Gundaker は

「親睦」と「学び」は、ロータリーの基盤（The base of Rotary）である（→ P9 参照）

と考え、この基盤の充実・活性化を図りながら、会員の価値ある奉仕の実践に繋げていくことこそ、ロータリークラブの義務であると強調しているのです。それだけに、例会で会員がロータリーを語る機会となる

＊ 会員スピーチ（→ P32参照）
＊ クラブ・フォーラム（→ P36参照）

の２つは重要です。

また、これは米国ならではのことでしょうが、Guy Gundaker は、

＊ ロータリーの例会では、決して酒の勢いを借りて議論してはならない。
＊ ロータリーの例会では、発言者は無意味な冗談を言ってはならない。

の２つの厳守事項を挙げた上で、例会の品位を保つことも重視しています。（→ P10参照）

なお、Guy Gundaker自身は言及していませんが、クラブの一体感という点では、

「ロータリーの例会は、ホッとする場、憩いの場、気持ちが落ちつく場、明るく楽しい場」

であることも重要でしょう。これらは、特に例会開始前の会場の雰囲気に現われます。そのためには、会員同士の気遣いや親交を促す工夫や配慮など、友情が育まれるような心配りが必要です。特に、

「クラブ・リーダーやベテラン会員は、新入会員や来訪者に対する声がけや助言を心がける」

ことは大切だと思います。新入会員や来訪者に、例会場で疎外感を感じさせてはなりません。

また、クラブの一体感を醸成していく企画や行事という点では、

＊ ロータリーソングの合唱
＊ 会員の表彰やお祝い（出席年数、誕生祝い、結婚記念日など）
＊ 会員またはゲストによる有意義な卓話
＊ ロータリーの研修、テーブル・ディスカッション（クラブ・フォーラム）

などを重視すべきであると、Guy Gundaker は述べています。

現代のロータリークラブなら、上記に加えて

＊「ロータリーの目的」、「四つのテスト」、「ロータリアンの行動規範」などの唱和と解説
＊「スマイル」の内容紹介
＊「ロータリーの友」や「ガバナー月信」の記事紹介

なども、好ましい企画や行事と言えるでしょう。

なにしろロータリアンは多忙な人が多いので、企画や行事については順序や時間配分にも配慮した上で、定刻通りに始まり、定刻通りに終わるような例会を心がけることも必要です。

クラブ会長は、以上の内容に十分配慮しながら、

「例会欠席者の数、さらにクラブの一体感は、魅力的で価値ある例会かどうかにかかっている」

という言葉を忘れず、常にリーダーシップを発揮しながらクラブ運営に臨んで欲しいと思います。

ここで、「クラブの一体感」について、大切なポイントをまとめておきます。

＜クラブの一体感を醸成していくための大切なポイント＞

● クラブ会長のリーダーシップ
● 心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）
● 魅力的で価値ある例会プログラム
● 例会は「親睦」を育む場であると同時に、「学び」を深める場
　＊ 会員同士の交流（懇談、意見交換、情報交換、討論）
　＊ 会員スピーチ、クラブ・フォーマル
● 例会の品位を落とす言動を慎む
● 例会は、ホッとする場、憩いの場、気持ちが落ちつく場、明るく楽しい場
　＊ 例会開始前の会場の雰囲気に対する気配り
　　会員同士の気遣いや親交を促す工夫や配慮
　　新入会員や来訪者に疎外感を感じさせない工夫や配慮
　＊ 例会における企画や行事の工夫や配慮
　　合唱、唱和、表彰、「ロータリーの友」や「ガバナー月信」の記事紹介
　　「スマイル」の内容紹介、有意義な卓話、テーブル・ディスカッションなど
● 例会スケジュールの時間配分と時間厳守

4）例会プログラム

Guy Gundaker は、

“通常１時間の昼食例会のうち、最初の半分は食事と親睦に使われる。したがって、単純計算で年間 52 時間の昼食例会があるとすれば、ロータリーの理想実現のために最大限に活用できる時間は、例会後半の僅か 26 時間しかないのである。”

と述べ、限りある少ない例会プログラムの時間を有意義なものにするように求めています。

① 会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会

Guy Gundaker は、

「限りある少ない例会時間を有意義なものにするには、会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会であることが重要である」

と述べ、昼食会後半の年間 26 時間しかない例会で卓話プログラムを行うのは有効・効率的であることを強調しています。

● クラブ会員や特別ゲストによる卓話プログラム

Guy Gundaker は、クラブ会員や特別ゲストが自分の仕事や業界の状況などを語る卓話プログラムについて、

“特別ゲストを招いてのスピーチは、会員にとって有益であることは言うまでもない。しかし、それ以上にクラブ会員のスピーチは有益であり、それを聴ける機会こそクラブ会員の大きな特権の１つである。”

と述べた上で、

スピーチを任せられた会員の専門分野や体験談などの話しは、

- **スピーチする会員にとって、プレゼンテーション能力を磨く機会となる**
- **聴いている会員にとって、事業や生活に新たな情報や示唆、意欲喚起の機会となる**
- **会員同士の信頼と敬愛の念、仲間意識などを深め合う機会となる**

という点で、会員スピーチの重要性を特に強調しています。まさに、ロータリーの基盤（親睦と学び）でもあるのです。（→ P9 参照）

実は、私自身のクラブ会長時代、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回２名ずつ（１人 15 分間）の会員スピーチ例会を年間９回行いました。また、同じテーマで、近隣クラブとの会長交換スピーチも行いました。どれもが、ロータリアンとしての矜持を語った内容で、信頼と敬愛の念を深め合っただけではなく、仕事やロータリー・ライフにも役立つ感動的なスピーチばかりでした。皆さんのクラブでも、試みては如何でしょう。

● ロータリーを学ぶための卓話プログラム（ロータリー研修）

Guy Gundaker は、ロータリーの理解を深めることを目的とした特別昼食会の重要性も強調しています。すなわち、そうした特別昼食会を少なくとも６週間に１回は開き、ロータリー情報委員会の担当のもと、ロータリーの原理について検討し、かつ深め合う卓話プログラムを求めているのです。

ロータリー研修で気をつけて欲しいのは、マンネリ化と退屈さです。それだけに、卓話者の人選をはじめ、話題や研修内容にも工夫や配慮が必要です。難しいことを分かり易く、しかし深く、かつ面白く話せる卓話者を選ぶべきでしょう。また、卓話後にクラブ・フォーラム（テーブル・ディスカッション）を行い、各テーブルの司会や発表を若い会員に任せるのも良い方法でしょう。（→ P36 参照）

② 会員の事業に助力を与える例会

Guy Gundaker は、

「どんなクラブ（教育、健康増進、社交など）にも、同じ組織に属する者同士、
商取引の機会はあるだろう」

と述べる一方、

「ロータリーでは、会員であるという理由だけで、商取引が増えるなどと考えてはいけない」

と戒めた上で、ロータリーにおける「会員の事業の向上」について、以下のように、
現実面と理想面に分けて説明しています。（← P14 参照）

● 現実面：「親睦」がもたらす事業の向上

現実面の説明は、

“例会は、親しみと友情の種が蒔かれ、それが育つ場である。その種は、食事を共にする例会ではすくすくと育ちやすい。それだけに、例会出席に励み、会員同士の交流を通じて、信頼と誠実に満ちた友情や仲間意識が芽生えれば、商取引が増えるのは当然である。”

という内容です。すなわち、「親睦」がもたらす事業の向上ですね。（← P14 参照）

そのためには、ロータリーの例会が

＊ ホッとする場、憩いの場、気持ちが落ちつく場、明るく楽しい場
＊ 会員同士が交流する場（懇談、意見交換、情報交換、討論）

であることが必要です。（← P30-31 参照）

以上の内容は、新入会員には必ず説明してあげてください。

● 理想面：「学び」がもたらす事業の向上

一方、理想面の説明としては、

“ロータリー活動を通じて
＊ 事業推進に必要な倫理および経営方法
＊ ロータリーの理想（奉仕という生き方）
を学び、それらを日常生活や事業生活で実践すれば、
やがて事業は向上発展する。”（← P14, 19, 45参照）

という内容です。すなわち、「学び」がもたらす事業の向上ですね。

「事業推進に必要な倫理および経営方法」の学びとして、Guy Gundaker は

＊ クラブ会員や特別ゲストによる卓話プログラム
＊『道徳律（職業倫理訓）』の唱和や解説

などの機会を例会で設けるように推奨しています。

前者の卓話プログラムについては、前述のように、会員の事業や生活に新たな情報や示唆、意欲喚起などをもたらすという点で大切です。（← P32 参照）

後者の『道徳律（職業倫理訓）』の唱和や解説については、現代で言えば、
『ロータリーの目的』、『四つのテスト』、『ロータリアンの行動規範』などの唱和や解説などに相当するでしょう。これらは、ロータリーの理想（奉仕という生き方）を学ぶことにも繋がるだけに、現状の課題も含めて、少し詳しく解説します。

最近、『ロータリーの目的』の内容を正しく理解しているロータリアンが少なくなったような気がします。それは、例会や地区セミナーなどで、『ロータリーの目的』の解説の機会が減ってきたことが原因ではないでしょうか。

我々ロータリアンが最も重視すべきは、言うまでもなく『ロータリーの目的』です。その内容や意義、歴史的変遷などが十分に理解されていない現状について、クラブ会長は重大な危機意識を持ち、ぜひ対処して欲しいと思います。

『四つのテスト』についても、その成り立ちを知らないロータリアンが増えてきたような気がします。また、邦訳そのものは名訳だと思いますが、２番目の“みんなに公平（fair）か”にある「fair」の意味について、equity、equality、impartiality などとの違いを知っておくことは必要でしょう。

また、『ロータリアンの行動規範』を正しく理解するためには、以下の２つの流れ

①『道徳律（職業倫理訓）』(1915 年)
→『職業奉仕に関する声明』(1987 年)
→『ロータリアンの職業宣言』(1989 年)
→『ロータリーの行動規範』(2011 年、改訂 2014 年)
→『ロータリアンの行動規範』(2014 年、改訂 2019 年)
②『目標設定計画（特に、職業奉仕の呼称と定義）』(1927 年)
→『標準ロータリークラブ定款（ 第６条の２）』(2007 年、改訂 2016年)

について、変遷の背景も含めて、知っておく必要があるでしょう。（← P48-52 参照）

いずれにしても、これらはＲＬＩ（ロータリーリーダーシップ研究会）プログラムでは学習できません。それこそ、事情に詳しいロータリアンから講義してもらうべきでしょう。

なお、Guy Gundaker は、以上のような学びを日常生活や事業生活で実践することを求めていますが、さらに「業界での実践」として、

「ロータリーからの代表（大使）として、業界に高い職業倫理基準と奉仕理念を広め、その業界をより良くしていく義務がある」（← P11, 15, 42 参照）

ことも強調しています。会員の事業向上のためには、その業界の発展も必要だということです

● 現実面と理想面の一体化：「親睦」と「学び」の一体化がもたらす事業の向上

いずれにしても、ロータリーにおける「会員の事業の向上」を、現実面と理想面に分けて述べた Guy Gundaker の見識には脱帽です。ロータリー創立後100 年以上たった今でも、こうした考え方に賛同するロータリアンは少なくないでしょう。しかも、日本人が得意とする「本音と建前」にも通じる内容です。

しかし、私自身は

“「会員の事業の向上」は、現実面と理想面に分けて考える必要はない。ロータリアンが出会い集う場の全て（特に例会）は、「親睦」を育む場であると同時に「学び」を深める場でもある。すなわち、「親睦」と「学び」は一体である。当然、上述の現実面と理想面も一体でなければならない。それでこそ、ロータリーではないか。”

と思っています。（→ P15参照）

そのためには、ロータリーの例会が、

＊ ホッとする場、憩いの場、気持ちが落ちつく場、明るく楽しい場

＊ 会員同士が交流する場（懇談、意見交換、情報交換、討論）

であることが必要です。その上で、

＊ ロータリーの理想と意欲を高揚させる、魅力的で価値ある例会プログラム

＊ 心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）

などを通じて、クラブ会員が事業や人生に有用な知識や考え方を学び、ロータリーの理想を学び、ロータリーの志を共にする仲間意識（親睦）を強め高め合うような例会であれば、自然と「会員の事業に助力を与える例会」となるでしょう。むしろ、それこそが自然な成り行きであって、そこには現実面とか理想面とかの考え方は必要ないのです。

強調しておきたいのは、

ロータリーの親睦と学びは一体であり、それは「ロータリーの基盤」である（← P9参照）

ということです。それが確実なクラブなら、「会員の事業に助力を与える例会」となるはずです。

③ 奉仕の扉を開く例会

Guy Gundaker は、

「ロータリアンは、奉仕能力の涵養を切望し、かつ奉仕に専念する人である」

と述べています。もちろん、そのためには

「クラブ会員が奉仕の心を学び、理解し、磨き上げ、価値ある実践に繋げていけるよう、奉仕の意欲が湧き上がっていく例会」

が必要です。これが、「奉仕の扉を開く例会」という意味なのです。

奉仕の意欲が湧き上がっていく例会としては、

＊ 心が洗われる会長挨拶（会長スピーチ）

＊ 会員スピーチ（ロータリーで学んだこと、ロータリアンとしての喜びなどのテーマ）

＊ ゲスト・スピーチやクラブ・フォーラム（奉仕の理念に関わるテーマ、奉仕の実践に役立つテーマ）

＊『ロータリーの目的』や『標準ロータリークラブ第６条（五大奉仕）』などの研修

＊ ロータリー財団の歴史・実績・意義の研修

＊ 地域のニーズ調査の発表と検討

＊ 地域住民（特に子供たち）とロータリアンとが協力し合う奉仕プログラムの検討

＊ 地域貢献（保護司、児童委員、ボランティア等）をしているクラブ会員や住民の講話・表彰

などが挙げられます。

もちろん、奉仕の実践のためには、意欲だけではなく知識も必要です。Guy Gundaker は、地域社会への奉仕のために、以下の知識を会員に提供する例会プログラムを推奨しています。

＊ 町の地理や産業活動　＊ 町や地域の歴史　＊ 地域社会の生活

＊ 公園や街路の状況　＊ 総合的な都市計画　＊ 町の港湾地区と外国との交易

＊ 交通機関の状況、諸問題　＊ 消防、警察、厚生、福祉などの自治体行政

現代においては、上記に加えて、

ローターアクトクラブ、インターアクトクラブ、ＲＹＬＡ、 青少年交換、米山記念奨学会、

ポリオプラス、ロータリー平和センター、ロータリー特別月間

などの知識や意義についても、ゲスト・スピーチを招くなどして、クラブ会員に提供すべきでしょう。

④ 夕刻の例会

Guy Gundaker は、

「夕刻の例会は、昼食例会よりも長い時間がとれるので、
個々の会員の成長と個々の会員の事業の向上に
繋げていくには、なおさら良い機会である」

と述べた上で、時間と気持ちに余裕のある夕刻のプログラムは、より精選された特別な内容で構成することを推奨しています。

さらに Guy は、ロータリーは事業経営者の議会のようなものだから、行事や議事を迅速に進行するのはよいとしても、次の２つについて心がけることを求めています。

＊ 充実したプログラムを十分に満喫すること
＊ 提案された問題を慎重に審議すること

それだけに、ロータリアンは次の言葉を肝に銘じて欲しいと思います。

**“夕刻の例会で、行事や議事、プログラムなどをなおざりにして、早めに夕食会へ
移行しようというような不埒な考えを、ロータリアンたる者、決して抱いてはなりません。
なぜなら、夕刻の例会 ＝ 懇親会ではないからです。”**

Guy Gundaker は夕刻の例会に相応しいプログラムを幾つか紹介していますが、ここでは Guy の主旨を踏まえながら、現代にも通じるものを幾つか提示しておきます。

（1）ロータリアン同士の討論会（クラブ・フォーラム）

クラブ・フォーラムは、ぜひ夕刻の例会で実施して欲しいプログラムです。
例えば、ロータリーの魅力と価値、クラブの長期計画、クラブ奉仕の目的と手法、
クラブの職業奉仕プログラム、会員増強や新会員教育の進め方、新たな地域貢献などをテーマに、
「基調講演 → テーブル・ディスカッション → 各テーブルからの発表」（合計 90 分）
という方式で検討し合うことは、ロータリーの志を深めながら友情を育む良い機会にもなるからです。親睦と学びの一体化という意味でも、最高の例会プログラムだと思います。

（2）新入会員の歓迎プログラム

Guy Gundaker は、新入会員の歓迎プログラムについて
“クラブ会長は、「ロータリーの在るべき姿」の話をするべきである。これは、例会に
参加している全会員に対して、ロータリーの理想を喚起する意味でも重要である。”
と述べています。具体例を次頁にまとめましたので、参考にしてください。（← P37 参照）

（3）ロータリー創立記念例会

ロータリー創立当時の歴史、ロータリーの創立者 Paul Percy Harris の人物像や言行録、
あるいは自クラブの創立時代の思い出などをベテラン会員から紹介してもらうなど、
ロータリー創立記念例会に相応しい企画を考えましょう。また、ロータリーの理念や
クラブの定款細則について話し合うのもよいと思います。

（4）近隣クラブへの訪問（合同例会）、家族例会、慈善活動事業の一部となっているクリスマス例会など

いずれにしても、ロータリークラブの全ての例会は、出席者が貴重な時間を割くに値する魅力的で価値ある内容でなければなりません。特に夕刻の例会では、

**“会員がロータリーの高い理想と意欲に燃えて、「自分の家庭、自分の仕事、自分の業界、
自分の町や州や国 に対して優れた奉仕をしよう」という決意を新たにする場であって欲しい。”**

と、Guy Gundaker は強調しているのです。

参考６： 新入会員を紹介する例会で話して欲しいクラブ会長の言葉

● ロータリークラブは、「ロータリーの目的」の達成を目指す組織であり、会員自身の成長、会員の事業の向上、そして社会の向上発展にも繋がるものです。さらに、多くの出会いや親睦、学び、奉仕、感動を通じて、会員の人生を豊かにしてくれます。（← P22 参照）

● ロータリークラブに入会したからといって、あなたに成功や幸福が約束されたわけではありません。あなたの素晴らしい人柄を多くのクラブ会員に知ってもらい、かつ信頼と誠実に満ちた真の友情が芽生えるよう、ロータリーを学び実践してください。そうすれば、ロータリーはあなたの人生を豊かに、かつ充実したものにしてくれます。（← P14, 22 参照）

● ロータリアンは、あらゆる場面や状況において価値ある向上活動に徹する使命があります。その高潔と信頼と奉仕の象徴として、我々は常にロータリーのバッジをつけなければなりません。“我々は、いつでもどこでもロータリアン！”です。（← P40, 42 参照）

● ロータリーは、①親睦と学びを基盤に、②立派なロータリアンを育てながら、③価値ある奉仕を通じて、社会に貢献する世界的な団体です。（← P59-60 参照）

●「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合うことです。それは、ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌のようなものです。良い土壌であるためには、親睦がロータリーの学びと一体でなければなりません。すなわち、親睦の中で学びを深め、学びを通して親睦を育むという相互作用が必要です。その相互作用が充実していればこそ栄養に満ちた土壌となり、ロータリーという苗木が立派に成長するのです。ロータリーの基盤は、親睦と学びです。大いに睦み集いながら、ロータリーを学んでください。（← P8-10 参照）

● ロータリアンが出会い集う場の全て（特に例会）は、「ロータリーの親睦」を育む場であり、「ロータリーの学び」を深め合う場でもあり、それこそがロータリーの基盤です。我々は、この基盤の充実・活性化（Grow Rotarians & Enjoy Rotary）を図りながら、価値ある奉仕の心と実践に満ちたロータリーとして、大いに成長発展（Grow Rotary）していかなければなりません。（← P9, 41 参照）

● ロータリークラブにおけるロータリアンの活動とは、例会に出席し、胸襟を開いて真摯に語り合うこと（懇談、意見交換、情報交換、討論）です。会員同士の語り合いとは、親睦の中で「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を学び合うことでもあります。そして、その「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を日常生活や事業生活の中で実践すれば、あなたの事業も、そして社会も向上発展していくでしょう。そのためには、あなたはクラブの例会に欠かさず出席しなくてはなりません。例会出席は、「素晴らしい真のロータリアン」になるための必要条件です。（← P7, 41 参照）

● その他：「ロータリーの目的」、「奉仕の理念」、「ロータリーの２つの標語」、「ロータリアンの行動規範」、「ロータリアンの利益」、「四つのテスト」などの解説

3．ロータリアン、かくあるべし

Guy Gundaker は、

“ロータリークラブに入会した者は、ロータリーの原則と慣例に基づく教育を受ける。そして、ロータリアンは、その教育の成果を「個人の向上の分野」と「他人のための活動の分野」で示すことが期待されており、ロータリークラブで学べば学ぶほど、その期待に応えたくなってしまうのである。”

と述べています。

留意して欲しいのは、Guy Gundaker がロータリアンに求めたのは、

“「個人の向上の分野」においても、また「他人のための活動の分野」においても、ロータリアンである以上、日常の全てにおいて果たすべき義務がある。それは、「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」である。”（← P45 参照）

というものです。すなわち、これが『ロータリアン、かくあるべし』の内容です。

それだけに、本項目『ロータリアン、かくあるべし』の内容こそ、現代の世界中のロータリアンに銘記して欲しいと思います。なぜなら、ロータリーに入会したということは、「奉仕という生き方」を宣言したも同然だからです。

さらに、Guy Gundaker は

「ロータリアンたる者、次の２つについて明確な回答を持つと同時に、その自らの回答に相応しい実践をしなくてはならない」

と強調しています。

1．ロータリアンにとって「例会出席」とは？
2．ロータリアンにとって「活動」とは？

【1】ロータリアンの「例会出席」～～～

【2】ロータリアンの「活動」～～～

実際、Guy Gundaker は

「ロータリアンは、安心して取引ができる人物である」

ことの理由として、

“それは、迅速で確実な取引を行うということで評判が良いからではなく、
価格や性能の表示に偽りがない製品を提供することで評判が良いからではなく、
公正で適切な取引を行うということで評判が良いからでもなく、
既にロータリアン（会員個人とその事業内容に絶大な信用がある人）だからだ。”

と述べた上で、

**“ロータリアンは、事業社会における最良の代表者である。
それだけに、その名に恥じないような生き方をしなくてはならない。
その証として、全てのロータリアンは、常にロータリーのバッジを
つけなければならない。バッジは、高潔と信頼と奉仕の象徴である。”**

と強調しているのです。

＜ロータリアンが ロータリーのバッジをつける理由＞

ロータリアンは、ロータリーに入会を許可されたというだけで、
「会員個人および会員の事業内容に絶大な信用がある」という幸せ（特権）を
得るのだから、クラブ会員や世間との付き合い、商取引なども順調に進むであろう。

だからこそ、ロータリークラブの会員は、日頃から信用に応えるだけの事業経営に
励む「素晴らしい真のロータリアン」であることを世間に表明（保証）するべきである。

さらに、業界や社会に対する貢献など、ロータリアンとしての活動が有意義なもので
あることを、世間に約束（保証）するべきである。

それらを表明・約束した証として、かつ高潔と信頼と奉仕の象徴として、
全てのロータリアンは、常にロータリーのバッジをつけなければならない。

いつの時代も、事業主には「信用」が大切ですが、ロータリーに入会しただけで「信用」という特権が得られるのは大きな魅力でしょう。実際、我々ロータリアンは、クラブ理事会が入会を承認した新入会員を「信用できる人物」とみなし、疑念の目で見ることはありません。この大切な魅力が汚されることのないよう、そして、なくなることがないようにしたいものです。

● 職場における職員教育

ロータリアン個人としての活動、すなわち、ロータリーが説く高い倫理基準と奉仕理念を自己の事業や専門職務で実践するにあたって、Guy Gundaker は職員教育の重要性についても述べています。

特に企業主による職員教育は、専門職務（医師、歯科医師、弁護士など）の人に比べて大変であることを次のように述べた上で、企業主を鼓舞しています。

“専門職務に従事するロータリアンは、個人差はあっても、普段から奉仕の実践をしています。
それだけに、周囲の職員も自然と感化されていくでしょう。しかし、同じロータリアンでも、
従業員を多くかかえる企業主は、全ての従業員に奉仕の心を植え付けなければ、奉仕の実践を
しているとは言えません。それこそ何度も繰り返し、植え付けていくしかないのです。”

現代のロータリーでは、職員教育の重要性はあまり強調されていないような気がします。しかし、事業の発展、地域の人材育成、そして地域の発展という点でも、ロータリアンにとって職場における職員教育は、とても大切な奉仕の実践であることを忘れてはなりません。

2）ロータリークラブにおける活動

Guy Gundaker は、ロータリアンにとって、

「ロータリークラブにおける活動は、個人としての活動に次いで、二番目に重要である」

と述べた上で、

“ロータリー運動におけるクラブの価値は、ロータリアンの積極的な例会出席にかかっている。例会に出席したロータリアンは、会員同士で懇談をしなくてはならない。例え、昼食や晩餐の場であっても、意見の交換を行うべきである。そして、自らの事業または専門職務について互いに語り合い、例会で提起された全ての問題についても積極的に討論しなくてはならない。なぜなら、ロータリーの例会では、職業を異にする他のロータリアンから有用な情報が得られたり、困難な問題に対しても別な角度から解決の糸口がもたらされたりするからである。”

と説明しています。簡潔に言えば、

「例会に出席し、会員同士が胸襟を開いて積極的に交流する（懇談、意見交換、情報交換、討論）」

ということです。まさに、ロータリークラブ本来の姿であると言ってよいでしょう。（← P13, 28, 30 参照）
もちろん、クラブの一体感を育むための気配りや行為、親交も大切です。（← P30-31 参照）

Guy Gundaker は

「会員同士の交流は、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合う」

という考えを持っていました。すなわち、例会での親睦の深まりです。さらに、

「例会における『事業推進に必要な倫理および経営方法』と『ロータリーの理想（奉仕という生き方）』という学びが、会員自身の成長、事業の向上、社会の発展に繋がる」

という考えも持っていました。すなわち、例会での学びの重要性です。

要するに、Guy Gundaker は

“親睦と学びこそが、ロータリーの基盤である。なぜなら親睦の中で学びを深め合い、学びの中で親睦を深め合っていくことで「Grow Rotarians & Enjoy Rotary」がもたらされ、それが事業の向上、社会の発展、そして「Grow Rotary」に繋がるのだから。”

と考えていたのです。（← P9, 37 参照）

言い換えれば、

「例会の中で、ロータリアン同士が“素晴らしい真のロータリアン”を目指して切磋琢磨していく」

ということであり、これこそが

「ロータリークラブにおける活動」＝「ロータリアンとしてのクラブ会員の務め」

なのです。

さて、Guy Gundaker が活躍した 100 年前のロータリー草創期に比べれば、高度情報社会と言われる現代社会では、クラブの例会で「自分の仕事に役立つ意見や情報を得やすい」というメリットは少ないかも知れません。

しかし、地域を代表する様々な組織のリーダーで、かつ奉仕の精神に満ちたロータリアンが集う例会では、互いの話を通して自分の事業訓や生活信条、人生観に良い影響をもたらす「学び」の機会は多いはずです。時には、交流を通して成功や飛躍のチャンス、素晴らしい感動に恵まれることもあるでしょう。少なくとも私は、こうした信頼に満ちたロータリアン同士の交流のおかげで、人間的にも成長できましたし、時には未知の世界を教えてもらい、素晴らしい体験も数多くさせていただきました。まさに、「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」です。だからこそ私は、「ロータリーは、人生を豊かにする」と確信しているのです。（← P22 参照）

3）業界における活動

Guy Gundaker は、

“ロータリアンは、業界の代表者ではない。ロータリーから各々の業界に派遣された、ロータリークラブの代表者（大使）である。”

と考えていました。

この考え方に基づいて、Guy は

“ロータリアンは、他の同業者にロータリーの原理と理想を説き、「職業倫理の価値」と「奉仕の精神」を伝える **義務** があるとともに、自分の業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせる **義務** がある。そして、その業界を向上発展させていくことこそ、ロータリアンにとって最も大切な「奉仕の機会」なのである。”

（This is Rotary's greatest opportunity for service.）

と述べています。言い換えれば、

「ロータリーからの大使として、高い職業倫理基準と奉仕理念を業界に広め、その業界をより良くしていくこと」

であり、これが

「業界における活動」＝「ロータリアンとしての業界代表の務め」

なのです。

● 現代におけるロータリアンの業界活動

20 世紀初頭のロータリー草創期に比べれば、今は法律、規制、監視なども整備され、そうそう悪いことはできなくなっています。それでも、汚職や談合、贈収賄、虚偽、改竄の類はなくなりません。むしろ、ガバナンス、コンプライアンス、リスクマネジメント、CSR（企業の社会的責任）などの重要性が叫ばれる現代だからこそ、ロータリーが育てた「素晴らしい真のロータリアン」を業界に派遣し、業界でリーダーシップを発揮してもらう必要があるのではないでしょうか。

すなわち、業界をより良くしていくことは、昔も今も変わらないロータリアンの「義務」であり、大切な「奉仕の機会」でもあります。その表明が、ロータリーのバッジなのです。（← P40 参照）

これに関連して、Guy Gundaker は

「自らの日常生活で、ロータリーの原則を実践に移さないロータリアンは、ロータリーの職業倫理における力強い主導者（a forceful teacher of Rotary ethics）にはなれない」

と述べています。要するに、

「職業倫理を旨とするロータリアンは、先ず自らの日常でロータリーの原則を実践せよ」

ということです。その上で彼は、職業倫理の力強い主導者となるべきロータリアンに対し、業界における具体的な活動として、以下の活動を求めているのです。内容的には、現代でも通じるものばかりですね。

> ロータリアンは、自己の職業分野の業界団体（地元レベル、州レベル，全国レベル）に所属する義務があり、その団体において以下の５つの活動を積極的に行うべきである。
>
> １．職業倫理の高い理想を志す者の考え方を支持し、同業者を指導すること
> ２．同業者に奉仕の精神を植え付け、奨励すること
> ３．アイデアや経営方法の交換によって、同業者の事業の効率を高めること
> ４．自らが属する業界の地位向上に努めること
> ５．同業者相互間および業界全体の利益のために、同業者と協力すること

4）地域における活動

Guy Gundaker は、

“ロータリーは、会員をより良き市民に成長させるための訓練の場である。
だからこそロータリアンは、地域社会、特に所属する公共的な慈善団体において、
積極的に価値ある奉仕をしなければならない。”

と述べています。

言い換えれば、

「ロータリーでの訓練で良き市民に成長したロータリアンは、世の中を良くしていく義務がある」

ということであり、これが

「地域における活動」 ＝ 「ロータリアンとしての地域住民の務め」

なのです。

また、Guy Gundaker は、

“ロータリアンにとって、「他人のために何かしよう」という
奉仕の心を実践する場合、最良の実践の場は家庭である。
そこには家族愛があるからこそ、心のこもった態度で
奉仕ができる。この家庭内での家族愛を実業の世界、
そして町、州、国へと及ぼし広げていくことが、
ロータリアンの義務と言ってよいだろう。”

と述べています。要するに、

“ロータリアンは、良き家庭人たれ！　良き事業人たれ！　良き市民たれ！”

ということですね。

良き市民となるには、「自分が住んでいる地域の様々な知識や情報」についても知らなくてはなりません。
それらの知識や情報は、もちろん個人としても収集するべきですが、クラブ例会でも提供される
べきであると、Guy Gundaker は述べています。（← P35 参照）

その上で、Guy は

“ロータリアンは、自分が住んでいる地域に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、
一人の市民として慈善的、博愛的、公共的な団体の会員として活動するべきである。
ロータリアンなら、その団体の中で積極的、かつ効果的な活動をすることができるし、
必要なことに対しては金払いもよい会員となるだろう。”

と記し、

“ロータリアンが一人の市民として行う奉仕活動にこそ、大きな価値がある。”

と述べているのです。

これは、

**「ロータリーは、クラブとしての団体活動よりもロータリアン個人としての地域活動、または
ロータリアンが所属する業界団体や公共的な慈善団体の会員としての地域活動を通して、
地域社会へ積極的に価値ある奉仕を行うべきである。」**（← P16参照）

という Guy Gundaker の考え方によるものであり、

1923年に採択された『決議23-34』の 6）「社会奉仕活動の選択指針」

にも色濃く反映されている内容です。（← P17参照）

留意して欲しいのは、Guy Gundaker が考える「ロータリアンの活動」には、現在の「国際奉仕」に相当する内容は含まれていないことです。なぜなら、1916 年に『A Talking Knowledge of Rotary』が発行された当時、ロータリーでは

奉仕 ＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、様々な場面や状況での奉仕
であり、これらを総称して「社会奉仕（Social Service（Service to Society）」とも表現する

という考え方が一般的だったからです。（← P18参照）

実際、ロータリーの奉仕において「国際奉仕」という名称が公式に使われるようになったのは、1928年以降です。（← P18, 48参照）

なお、現代におけるロータリーの奉仕は、

クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕（Community Service ＝ 地域社会奉仕）、国際奉仕、青少年奉仕の５つに分類されていますので、この点にも留意してください。（← P18, 48 参照）

ここで、Guy Gundaker が考える「ロータリアンの活動」について要約します。

＜ロータリアンの活動（active Rotarian）＞

１）個人としての活動（ロータリアンとしての職業上の務め）

ロータリーが説く倫理基準と奉仕理念を、自己の事業や専門職務において実践すること

＊ ロータリーのバッジを着用し、高潔と信頼と奉仕の職業人としての証とすること

＊ 事業主として、全従業員に奉仕の心を植え付けること

２）ロータリークラブにおける活動（ロータリアンとしてのクラブ会員の務め）

例会に出席し、会員同士の交流（懇談、意見交換、情報交換、討論）を通して
親睦と学びを深め合い、素晴らしい真のロータリアンに成長することによって、
事業の向上、社会の発展に繋げていくこと

３）業界における活動（ロータリアンとしての業界代表の務め）

ロータリーからの代表者（大使）として、高い職業倫理基準と奉仕理念を業界に広め、
その業界をより良くしていくこと

４）地域における活動（ロータリアンとしての地域住民の務め）

自分が住んでいる地域に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、
一人の市民として、または業界団体や市民組織の会員としての活動を通して、
地域社会へ積極的に価値ある奉仕をすること

以上をまとめれば、

「ロータリーは、自分自身を、事業を、業界を、
そして社会全体を向上させる運動である」

ということであり、だからこそ、

「ロータリアンは、社会全体の様々な場面や状況において、
価値ある奉仕（向上や幸福をもたらす行動）に徹する使命がある」

ということになるのではないでしょうか。（← P19参照）

要するに、

“我々は、いつでもどこでもロータリアン！”

なのです。

4．Guy Gundaker の今日的意義

【1】「ロータリーの目的」と Guy Gundaker ～～～

＜The ideals of Rotary：ロータリーの理想（奉仕という生き方）＞

「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」とは、社会全体の様々な場面や状況における「向上や幸福をもたらすための理念と行動」である。これを学び、実践するのは、ロータリーとロータリアンの「義務」である。具体的には、

＊ 個人生活、事業生活、社会生活など、全ての場で実践すべきものである。
＊ 職業倫理全般にも通じるものである。
＊ 学び、実践することで、
- 自己の事業の向上発展に繋がるものである。
- 会員の業界全体の向上発展に繋がるものである。
- 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上に繋がるものである。

実は、この「the ideals of Rotary：ロータリーの理想（奉仕という生き方）」こそ、「the ideal of service：奉仕の理想（理念）」に繋がるものなのです。

ＲＩの公式文書に「奉仕の理想（理念）」という言葉が最初に出てくるのは、『A Talking Knowledge of Rotary』発行の２年後で、1918 年に改定された「国際ロータリークラブ 連合会の目的（第３の（b））」

奉仕の理想（理念）は、すべての価値ある事業の基礎である

(The ideal of SERVICE as the basis of all worthy enterprise)

という記載です。今さら言うまでもなく、現在の『ロータリーの目的』の冒頭でも使われている表現です。もちろん、これは Guy Gundaker の

ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を学び、実践すれば、事業は向上発展する

という考え方から由来したものでしょう。

さらに、この「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」は、1923 年に採択された『決議 23-34』の冒頭の文章にも色濃く反映されています。

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて **社会奉仕** とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に **奉仕の理想（the ideal of service）** を適用することを奨励、育成することである。

ここで留意して欲しいのは、上記の文中にある**『社会奉仕』**という言葉です。すなわち、『決議 23-34』が採択された1923年当時は、

『奉仕』 ＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域、社会、州、国など、様々な場面や状況での奉仕であり、これら全体を呼称して『社会奉仕』とも表現する（← P18参照）

という考え方が一般的でした。したがって、『決議 23-34』の冒頭の文章で使われている**『社会奉仕』**とは、社会全体の様々な場面や状況での「奉仕」という意味であり、現代の「社会奉仕（＝ 地域社会奉仕）」という意味ではないのです。

そして、この『決議 23-34』の冒頭の文章から**『社会奉仕』という言葉を除いた内容**が、現在の『ロータリーの目的（第３）』なのです。

＜現在：ロータリーの目的（第３）＞

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、**奉仕の理念（the ideal of service）** を実践すること；

なお、この『ロータリーの目的（第３）』はロータリーの社会奉仕を説明したものと主張する人がいますが、それは間違いです。なぜなら、現在のロータリーの社会奉仕は地域社会奉仕を指す言葉であって、その地域社会奉仕に“奉仕の理念を事業生活において実践する”という職業奉仕が混ざっているのは矛盾するからです。要するに、『ロータリーの目的（第３）』は、あくまで Guy の時代の社会奉仕（上記参照）なのです

●「the ideal of service：奉仕の理想（理念）」の起源

いずれにしても、Guy Gundaker の「the ideal of Rotary：ロータリーの理想（奉仕という生き方）」は、「the ideal of service：奉仕の理想（理念）」として、その後の『ロータリーの目的』や『決議23-34』に受け継がれていったのです。すなわち、

「the ideal of service：奉仕の理想（理念）」の起源

＝ Guy Gundaker の「the ideal of Rotary：ロータリーの理想（奉仕という生き方）」

ということです。最近、「ロータリーの奉仕の理念とは何か？」という議論をよく耳にしますが、著名なロータリアンでも、この歴史的な流れを知らない人が意外に多いようです。

●『ロータリーの目的』は、「素晴らしい真のロータリアン」の生き方である

ここで、お手元のロータリー手帳を開き、現在の『ロータリーの目的』をじっくり読んでみてください。その上で、その内容全体を短い言葉で述べるとすれば、どういう表現になるかを考えてください。

もちろん、その回答は人によって様々でしょうが、私は、

“素晴らしい真のロータリアン”になろう！（← P7, 56 参照）

という言葉でよいのではないかと思っています。言い換えれば、

『ロータリーの目的』は、“素晴らしい真のロータリアン”の生き方を示したもの

ということです。多くのロータリアンは、概ね賛同してくださるのではないでしょうか。

Guy Gundaker にとって、「ロータリーの究極の目的」とは、

「人間性の向上というロータリーでの成長を通じて、事業、業界、そして社会の向上に貢献する“素晴らしい真のロータリアン”を育てること（Grow Rotarians）」（← P6-7 参照）

でした。要するに、

“Guy Gundaker のロータリー観”の根幹は「Grow Rotarians」であり、それは現在の『ロータリーの目的』の真髄である

ということです。

言うまでもなく、「事業や専門職務や地域社会のリーダー」が素晴らしい真のロータリアンに成長（Grow Rotarians）していくからこそ、それが「Grow Rotary」に繋がり、世の中がさらに良くなっていくのです。逆に、「Grow Rotarians」を疎かにすれば、素晴らしい真のロータリアンが育たなくなり、それこそロータリーの衰退に繋がります。だからこそ、私は

「Grow Rotarians」なくして、「Grow Rotary」は有り得ない

と思っています。（← P7 参照）

「Grow Rotarians」のために最も大切なことは、“Guy Gundaker のロータリー観”の根幹でもある「魅力的で価値ある例会」（← P28-37 参照）です。だからこそ、それが「Enjoy Rotary」をもたらし、ロータリーは発展してきたのではないでしょうか。

なにより、「Grow Rotarians」はクラブ・リーダーの義務であり、クラブ会員の義務でもあるということを忘れてはなりません。その双方の義務を合わせたものが、クラブ奉仕です。（← P53-54 参照）

【2】「職業奉仕」と Guy Gundaker ～～～

また、クラブの職業奉仕委員会における具体的なプログラム（職業奉仕委員会の活動）としては、1931 年の「The Aims and Objects Plan（Pamphlet No.3B）」に

「職業奉仕に関する問題をクラブで話し合うとともに、職業奉仕の研究、発展、実践を奨励すること」

と記されています。さらに、こうしたプログラムを通じて、会員に対して個人の成長、事業の成功、他者からの尊敬、自尊心、社会に貢献をしたという満足感などが得られるようにすることも強調されています。これらは、まさに“Guy Gundaker のロータリー観”に通じることばかりですね。

以上の内容をまとめると、職業奉仕という名称が使われるようになった当時は、

- **職業奉仕 ＝ 職業の場における奉仕の理念の実践（職業を通じての奉仕）**
  ＝ ロータリアン個人としての活動（ロータリアンとしての職業上の務め）
- **職業奉仕委員会の活動 ＝ 職業人である会員に対するロータリークラブの義務**

ということになります。

しかし、次の項目で説明するように、1987 年を境にして、職業奉仕の内容は変わっていくのです。

2）「職業奉仕」の内容の変化（ ＝「職業を活かした社会貢献」の追加）

2004 年 11 月の RI 理事会で、ロータリークラブの強化を目的とした CLP（Club Leadership Plan）が決定されました。さらに、CLP の本格的導入に伴い、長年に亘って『推奨ロータリークラブ細則』に記載されていた職業奉仕をはじめとした「委員会の任務」の記載が、2007 年からなくなりました。そして、2007 年の『標準ロータリークラブ定款』に、四大奉仕部門が初めて明文化されたのです。

＜標準ロータリークラブ定款における「職業奉仕」＞

- **2007 年　標準ロータリークラブ定款　第５条　四大奉仕部門**
  2．奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理想を生かしていくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うことが含まれる。
- **2010 年　標準ロータリークラブ定款　第５条　五大奉仕部門**
  2．（内容は2007年の文章と同じ）
- **2016 年　標準ロータリークラブ定款　第６条　五大奉仕部門**
  2．奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。

注目して欲しいのは、新たに追加改定された 2016 年の『標準ロータリークラブ定款（第６条の２）』の職業奉仕に関する記載です。そこには、それまでなかった「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えること」という表現が追加されているのです。

しかし、この表現は、唐突に出てきたわけではありません。実は、既に 1987 年の『職業奉仕に関する声明（Statement on Vocational Service）の３』に記載されているのです。

＜職業奉仕に関する声明（1987 年）＞

職業奉仕とは、あらゆる職業に携わる中で、奉仕の理想を生かしていくことをロータリーが育成、支援する方法である。 職業奉仕の理想に本来込められているものは次のものである。

1．あらゆる職業において最も高度の道徳的水準を守り、推進すること。その中には、雇主、従業員、同僚への誠実、忠実さ、また、この人達や同業者、一般の人々、職業上の知己すべてへの公正な取り扱いも含まれる；

2，自己の職業またはロータリアンの携わる職業のみならず、あらゆる有用な職業の社会に対する価値を認めること；

3．自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てること。 （以下省略）

この「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てる」という表現は、その後も、

- 1989 年『ロータリアンの職業宣言』
- 2011 年『ロータリーの行動規範』
- 2014 年『ロータリーの行動規範』（改定）
- 2014 年『ロータリアンの行動規範』
- 2016 年『ロータリアンの行動規範』（改定）

に職業奉仕活動の１つとして,明記され、それが 2016 年の『標準ロータリークラブ定款（第６条の２）』に追加されたということです。要するに、ＲＩは

「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てる奉仕」（職業を活かした社会貢献）

を、1987 年以降、職業奉仕活動の１つとして,強く推進してきたということです。

ここで、次の奉仕活動について考えてみましょう。

①ロータリアンの大工が椅子を製作し、老人施設や公園に寄贈すること

②ロータリークラブの事業として、クラブ会員の企業経営者らが中学校で職業講話をすること

ベテランのロータリアンにとっては、恐らく「①は社会奉仕、②は青少年奉仕」でしょう。
しかし、現代のロータリーでは、「①②ともに職業奉仕」ということになるのです。
なぜなら、①②は「ロータリアンの職業を活かした社会貢献」に相当するからです。

もちろん、「職業を通じての奉仕（ロータリアンとしての職業上の務め ）こそが職業奉仕」と考えてきたベテランのロータリアンにとっては、「①②ともに職業奉仕」という考えを簡単に受け入れることはできないでしょう。しかし、そういう方々にも考えて欲しいのです。上記の①②は、

- どちらも価値ある奉仕活動なのではありませんか？
- しかも、職業人であるロータリアンだからこそ、上手にできる奉仕活動なのではありませんか？

Guy Gundaker が『A Talking Knowledge of Rotary』を書いた時代は、

奉仕 ＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、社会全体の様々な場面や状況での奉仕

でした。それだけに、Guy Gundakerを信奉する私は、

いつでもどこでもロータリアン！（いつでもどこでも、ロータリアンの務めを果たす） （← P44参照）

という言葉を何よりも大切にしています。

そういう観点からすれば、1987 年以降は

職業奉仕 ＝「職業を通じての奉仕（ロータリアンとしての職業上の務め ）」
＋「職業を活かした社会貢献」

となったことについて、私自身は気にはなりません。なぜなら、後者が追加されたに過ぎないからです。

3）21 世紀の「職業奉仕」（ ＝ 職業人としてのロータリアンの務め）

いずれにしても、1987 年に「職業奉仕に関する声明」が出されるまでは、

職業奉仕 ＝ 職業の場における奉仕の理念の実践（職業を通じての奉仕）

＝ ロータリアン個人としての活動 （ロータリアンとしての職業上の務め）

でした。

ところが、1987 年以降は、上記に加えて

職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てる奉仕（職業を活かした社会貢献）

も職業奉仕になったということです。

したがって、21 世紀の「職業奉仕」は、次のように考えればよいのではないでしょうか。

＜21 世紀の「職業奉仕」＞
職業奉仕 ＝「職業を通じての奉仕（ロータリアンとしての職業上の務め ）」
＋「職業を活かした社会貢献」
＝ 職業人としてのロータリアンの務め

My Rotary にある「奉仕部門」の職業奉仕についての説明にしても、以前は

“職業奉仕とは、ロータリアンが「各々の職業を通じて他の人々に奉仕すること」、そして「高い道徳的水準を保つこと」を奨励するものである。”

（Vocational Service encourages Rotarians to serve others through their professions and to practice high ethical standards.）

であって、要するに「ロータリアンとしての職業上の務め 」でした。

しかし、現在の My Rotary には、

“職業奉仕は、すべてのロータリアンが倫理と高潔さをもって仕事にあたり、職業の知識やスキルを社会のニーズ解決のために進んで役立てることです。”

（Vocational Service calls on every Rotarian to work with integrity and contribute their expertise to the problems and needs of society.）

と記されており、明らかに「職業人としてのロータリアンの務め」になっているのです。

したがって、以下の①②は「職業の知識やスキルを社会のニーズ解決のために進んで役立てること」に相当するので、21 世紀のロータリーにおいては職業奉仕活動なのです。

①ロータリアンの大工が椅子を製作し、老人施設や公園に寄贈すること

②ロータリークラブの事業として、クラブ会員の企業経営者らが中学校で職業講話をすること

これは個人的な考えですが、奉仕を五大奉仕部門に分けた利点の１つは、クラブや地区の委員会構成を考える上で便利だったからではないでしょうか。そういう意味では、私にとって上記②の奉仕活動は、

「クラブの職業奉仕委員会が担当するのか、それとも青少年奉仕委員会が担当するのか」

という問題に過ぎないのです。どちらの委員会が担当しようと、大切な奉仕活動です。（← P18参照）

いずれにしても、ロータリーで最も重要なのは、「奉仕の理念」を様々な場面や状況で実践することであって、Guy Gundaker の言葉で言えば「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を実践することです。我々ロータリアンは、このことを忘れてはなりません。（← P19, 45-47 参照）

参考７：職業奉仕の森

「職業奉仕は難しい」という言葉をよく耳にします。なぜでしょう？　理由は色々あるとは思いますが、大きな理由の一つは、ロータリーの大先輩達による職業奉仕の説明が、人によってかなり異なるからではないでしょうか？

例えば、職業奉仕は「Arthur Frederick Sheldon の考えそのものだ」と言う人、「職業倫理そのものだ」と言う人、「天職として高潔な仕事をすることだ」と言う人もいます。さらには、道徳律（職業倫理訓）や大連宣言を説く人、「四つのテスト」を説く人もいます。ところが、前述したように、現在の職業奉仕の公式定義は『標準ロータリークラブ定款（第６条の２）』なのです。これでは、説明を聞いている人が混乱するのは当然です。

そうしたロータリーの大先輩達に共通する特徴は、「職業奉仕は一本の大木」であるかのような説明ではないでしょうか。しかし、ロータリーの歴史を大好きになり、私なりに広く深く学んできた自分としては、

“職業奉仕は一本の大木ではない。むしろ、職業奉仕は森である。”

と思うのです。

森は、高い所、低い所、陽のあたる所、陽があたりにくい所など、各々の場所で生えている木々は違いますし、また互いに影響し合って生えています。しかし、それら全体で森なのです。ですから、例えば高い所に生えている木々だけを説明しても、その森の全てを語ったことにはなりません。それと同様に、

“職業奉仕に対する考え方は、歴史上、間違いなく幾つもある。すなわち、
職業奉仕という森には、異なる様々な木々が生い茂り、互いに影響し合って育っている。
だから、それらの木々全部を対象にして、はじめて職業奉仕が理解できるようになる。”

と言いたいのです。

では、「職業奉仕の森」にはどのような木々が生い茂っているのでしょう？　私は、以下に示したように、職業奉仕の森は６つの木々群（そのうちの３つはＡＦ Sheldon の奉仕理念）からできていると思います。

● **職業倫理 ＝ 尊敬、信頼**
　職業倫理の高揚が尊敬と信頼を生み、事業は成功する
● ＡＦ Sheldon の奉仕理念
　＊職業 ＝ 社会への奉仕
　＊奉仕 ＝ 継続的利益のための人間関係の基本
　　相手のニーズを最高に良く汲み取り、
　　それを最高の形で満たすにすること
　＊職業奉仕 ＝ 顧客獲得のための最善の経営方法
　　顧客奉仕の実践により、事業は成功する
● **職業 ＝ 天職**（尊重すべき崇高な職業）
● **職業を活かした社会貢献**
　自己の職業上の知識や技術を活かした社会貢献

もちろん、最後に（1987 年以降）生い茂ってきたのが「職業を活かした社会貢献」の木々群であり、

職業奉仕 ＝「職業を通じての奉仕（ロータリアンとしての職業上の務め）」＋「職業を活かした社会貢献」
＝ 職業人としてのロータリアンの務め（ ＝ 職業奉仕の森）

が成立するのは、言うまでもありません。（← P51 参照）

【3】「クラブ奉仕」と Guy Gundaker ～～～

2）『標準ロータリークラブ定款』に明文化された「クラブ奉仕」の解釈

さて、クラブ奉仕委員会という名称がクラブ管理運営委員会へと変更された 2007 年、『標準ロータリークラブ定款』に四大奉仕部門が初めて明文化され、「クラブ奉仕」が定義されました。以来、その定義の内容は、2022 年の今日まで変わっていません。

＜標準ロータリークラブ定款における「クラブ奉仕」＞

● 2022 年　標準ロータリークラブ定款　第６条　五大奉仕部門

１．奉仕の第一部門であるクラブ奉仕は、本クラブの機能を充実させるために、クラブ 内で会員が取るべき行動に関わるものである。

ところが、上記の文中にある「本クラブの機能を充実させる」と「クラブ 内で会員が取るべき行動」については何ら説明がなく、具体的な内容が分かりません。少なくとも、新入会員には意味不明でしょう。

先ず、「本クラブの機能を充実させる」についてですが、人によって様々な意見はあるかも知れませんが、前述の「The Aims and Objects Plan（Pamphlet No.３）」の記載を参考に考えれば、

クラブの機能とは、“素晴らしい真のロータリアン”を育成し、支援すること（← 53 参照）

であり、その機能を充実させるという理解でよいと思います。

一方、「クラブ 内で会員が取るべき行動」とは、前述のように

① ロータリアン（＝一般会員）としてのクラブでの務め

② クラブ運営を担うクラブ・リーダーの務め（クラブ管理運営）

の２つと理解すべきでしょう。（← P53 参照）

＜クラブ奉仕の正しい意味＞

クラブ奉仕は、“素晴らしい真のロータリアン”の育成し、支援するための「クラブ会員の務めとクラブ・リーダーの務め」である。

参考８：ＤＥＩと Toleration

ＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）は、共生社会や戦略的な組織運営という観点から、最近よく使われる言葉です。ロータリーにおいても、クラブ運営にＤＥＩを採り入れながら、会員のニーズや期待に応えるクラブ戦略や会員増強計画のもと、柔軟で持続可能なクラブ作りが推奨されています。実際、My Rotary の「奉仕部門」にあるクラブ奉仕の説明にも、ＤＥＩに関連して

「会員同士の関係を育み、積極的な会員増強計画を実行して、活気あるクラブづくりを行うこと」

と記されています。要するに、ＤＥＩはクラブ活性化のための効果的な手法だということです。

クラブ活性化とは、クラブ奉仕の充実です。そのためには、クラブ会員の誰もがクラブ奉仕の目的と中身を正しく理解していること、かつ魅力的で価値ある例会が開催されていることが大前提です。

また、ＤＥＩに満ちた組織であるためには、構成員各自に「Toleration（寛容）」の精神が求められます。それは、尊重、受容、我慢という意味でもあります。それだけに、ロータリーの創始者 Paul Percy Harris が「The National Rotarian」創刊号（1911 年）に寄稿した“Rational Rotarianism”の中で、

「ロータリーの発展のためには、Toleration が最も大切である」（→ P9, 26, 56 参照）

と述べているのは、実に興味深いことです。Paul P Harris は、親睦には寛容が必要であり、それなくしてロータリーの発展はないと主張したのです。100 年以上たった今でも大切な、まさに珠玉の言葉ですね。

【4】「会員増強」と Guy Gundaker ～～～

2）ロータリークラブが普段から留意すべきこと

ここで、「実際にロータリークラブで10年以上に亘って会員であり続けているロータリアン」の共通点を考えてみましょう。私が所属する寒河江ＲＣや地区内外の多数の友人ロータリアンを見る限り、それは

① 人格が高潔で、社交性がある人物

② 事業や業界の向上、地域や社会の発展に意欲的に貢献し、それらに喜びと誇りを感じている人物

③ ロータリアンとして成長するという自覚を持ち、その修養に励んでいる人物（Grow Rotarians）

④ ロータリーの時間や世界を楽しんでいる人物（Enjoy Rotary）

の４つではないでしょうか。

上記の①②は、現在のロータリークラブ入会資格（← P6参照）と共通しています。したがって、③の「Grow Rotarians」および④の「Enjoy Rotary」の両方に魅力や価値を感じる有能な人物こそ、“素晴らしい真のロータリアン”に成長し、ロータリーを退会しない会員になるということでしょう。

しかし、せっかく有能な人物がロータリークラブに入会しても、クラブ自体に魅力や価値がなければ間違いなく退会していくはずです。それだけに会員増強には、クラブ会長のリーダーシップのもと、

「親睦、学び、成長、奉仕を主体としたクラブ運営がなされ、
魅力的で価値ある例会が開催されているロータリークラブ」（→ P24, 26, 28 参照）

であることが、何よりも必要だと言いたいのです。要するに、「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」に満ちたロータリークラブであることです。

もう１つ、大切なことがあります。それは、ＲＩが日頃のクラブ運営について強調している

ＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）

です。これは、様々な背景を持つロータリアンの親睦を確かなものにし、活気あるクラブを目指す上でも効果的な手法です。（→ P9, 26, 54 参照）

しかし、ＤＥＩは新しいことでもないし、難しいことでもないのです。ロータリーの創始者 Paul Percy Harris が 100 年以上前に強調し、ロータリーがこれまでも大切にしてきたた「Toleration（寛容、尊重、受容、我慢）」の精神を、現代においても会員一人一人が大切にすればよいのです。（→ P9, 26, 54 参照）
しかも、「Toleration」は人づきあいの基本です。当然、クラブの文化でなくてはなりません。

さらに、既存会員の誰もが、

「ロータリーとは何か？　ロータリーの魅力や価値とは何か？　なぜ会員増強が必要か？」

について、自信を持って答えられるクラブであることも重要です。実際、そういうクラブでなければ“素晴らしい真のロータリアン”が育つはずはないし、新入会員を増やす気運も盛り上がらないでしょう。
そういう意味でも、ロータリーの研修、特にクラブ・フォーラムは大切です。（→ P32, 36, 59-60 参照）
いずれにしても、クラブ会長の心意気とリーダーシップが必要だということです。

＜会員増強に必要な条件（入会後も会員であり続ける条件）＞

クラブ会長の心意気とリーダーシップのもと、

- 入会資格を満たし、多様な分野から、ロータリアンに相応しい高潔な人物を勧誘すること。
- 親睦、学び、成長、奉仕を主体としたクラブ運営がなされ、魅力的で価値ある例会が開催されているロータリークラブであること。（Grow Rotarians & Enjoy Rotary）
- クラブにＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）を大切にする寛容（Toleration）の文化があること。
- クラブ会員の誰もが、ロータリーの意義と会員増強の必要性を理解していること。

【5】「現代のロータリー」と Guy Gundaker ～～～

一方、最近のＲＩが重要視しているのは、

１．公共イメージの向上
２．ポリオ撲滅
３．ロータ リー財団の奉仕プロジェクト
４．会員増強とクラブ拡大
５．世界平和

の５つと言ってよいでしょう。まさに、ＲＩは

「Grow Rotary」

を目指しているのです。

では、ロータリーが上記の５項目を実現達成していくためには何が必要でしょう？
人によって意見は様々あるでしょうが、Guy Gundaker を信奉する私としては、

＊ クラブ会長のリーダーシップ（→ P24-25 参照）
＊ ロータリアンに相応しい高潔な人が、会員として勧誘されていること（→ P26, 55-56 参照）
＊ 親睦、学び、成長、奉仕を大切にしたクラブ運営がなされていること（→ P24-25 参照）
＊ 魅力的で価値ある例会が開催されていること（→ P28-37 参照）
＊ 会員の誰もが、ロータリーの目的や魅力、価値を理解していること（→ P56 参照）
＊ クラブにＤＥＩ（Diversity, Equity, Inclusion：多様性、公平性、包摂性）を大切にする寛容（Toleration）の文化があること（→ P9, 26, 54. 56 参照）

が必要だと思います。

そうすれば、クラブ会員は“素晴らしい真のロータリアン”を目指すとともに、ロータリーの高い理想と意欲に燃えて、自分の家庭、仕事、業界、町や国、世界に対して、さらに意義ある奉仕をするようになるでしょう。そして、ロータリアンであることに誇りを持ち、ロータリーは人生を豊かにしてくれることに気づくでしょう。

要するに、今こそ

「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」に満ちたロータリークラブの姿

が必要なのではないかと言いたいのです。そのためには、上述した内容をＲＩが提唱し、それを地区ガバナーがクラブに強く推奨していかなければなりません。

実際、そういう姿のロータリークラブばかりなら、ＲＩが重要視する上記5項目は、自然と達成に近づいていくのではないでしょうか。

以上をまとめると、

21 世紀の「Grow Rotary」のためにも、“Guy Gundaker のロータリー観”は大切である。
そのためのキーワードは、「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」である。

ということです。それだけに、

古くて新しい“Guy Gundaker のロータリー観”

と言ってもよいでしょう。

私は、Guy Gundaker が大好きです。
彼のおかげで、私はロータリアンであることに誇りを感じています。
まさに今、私が Guy Gundaker に贈りたい言葉は、

“見よ、あの素晴らしいロータリアンを！”

5．What is Rotary？

ここでは、ロータリーの定義について考えていきます。歴史的には、先ず以下の２つの文章を挙げなくてはなりません。

＜ロータリーの定義（1）＞

① ロータリーの根本は、利己と利他の心を上手く調和させる「超我の奉仕」という人生哲学である。それは、実生活上、実に道理にかなった「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という言葉を実践の原理・原則とした人生哲学である。　（1923年：決議23-34 の１）＜一部改編／要約＞）

② ロータリーは、人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを目指した、事業および専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体である。

（1976年ＲＩ理事会決定）

私自身は、上記の２つを、

①は、ロータリー情報としての「会員向けの説明」

②は、ロータリー広報としての「一般人向けの説明」

というように使い分けながら話しています。

しかし、“Guy Gundakerのロータリー観”の素晴らしさを知った皆さんは、上記の①②では、ロータリーの定義としては物足りないのではないでしょうか。なぜなら、Guy Gundaker が重要視していた『ロータリーの基盤（The base of Rotary）』である「親睦」と「学び」が記されていないからです。

ちなみに、Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」は、以下のような内容です。

＜Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」＞

ロータリーとは、

ロータリークラブにおいては**「親睦と学びの場」**であり、

ロータリアンにおいては**「人間性の向上」**をもたらすものであり、

仕事においては**「事業の発展向上」**に繋がるものであり、

世間においては**「世の中を良くしていく向上運動」**であり、

究極の目的は**「素晴らしい真のロータリアン」**を育てること

（Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians）

である。

それだけに、Guy Gundaker が生きていれば、現代のロータリーを次のように定義するでしょう。

＜ロータリーの定義（2）＞

ロータリーは、事業、専門職務、地域社会のリーダーらによって構成され、親睦、学び、寛容、個人の資質向上、事業や業界の向上発展に努めるとともに、家庭、仲間、職場、地域、国際社会における幸福の達成に寄与する「奉仕の心と実践」に満ちた立派なロータリアンを育てる世界的な団体である。

（Guy Gundaker のロータリー観を元に、最近のＲＩの方針も加味して私が作成した文書）

個人的には上記で完璧だと思っていますが、文が長過ぎて覚えてもらえないでしょう。そこで、次のような「最も簡潔なロータリーの定義」を皆様に提案します。もちろん、私自身が「What is Rotary ?」と質問されたら、この「最も簡潔なロータリーの定義」を回答します。

＜What is Rotary ? ：**最も簡潔なロータリーの定義**＞

ロータリーは、

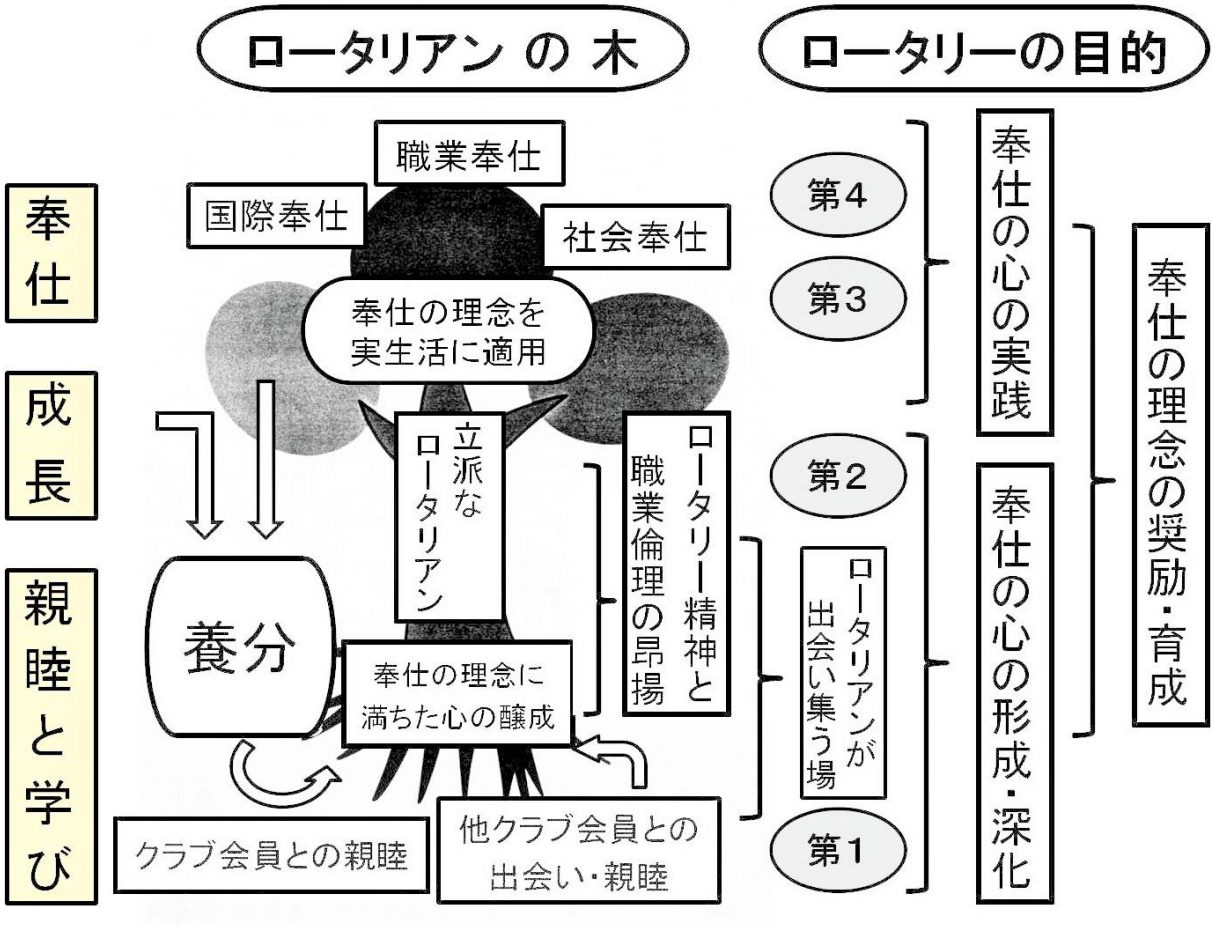
① 親睦と学びを基盤に、【親睦と学び】

② 立派なロータリアンを育てながら、【成長】

③ 価値ある奉仕を通じて、【奉仕】

社会に貢献する世界的な団体である。

以下に、上記の内容を「ロータリーの目的」と対比しながら「ロータリアンの木」として図式化します。これは、「Guy Gundaker の ロータリー観」の 図式化でもあります。



最後に、Guy Gundaker は次の２つを強調していることを銘記してください。

＊ロータリーは、“素晴らしい真のロータリアン” を育てよう！

＊ロータリアンは、親睦と学びと奉仕に邁進しよう！

これらは、まさに「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」であり、だからこそ 20 世紀は

“100 年以上に亘ってロータリーが発展（Grow Rotary）してきた最大の理由は、

「Grow Rotarians」と「Enjoy Rotary」である。”

ということです。21 世紀を生きる我々ロータリアンも、これを継承していかなくてはなりません。

附 記

（第 2800 地区ホームページＰＤＦ版のみ掲載）

附記１　ロータリーのクラブ運営（総論：心得と役割）

ロータリアンからしばしば質問されることの一つに、

“ロータリーでは、なぜ「役員（officer）」と「理事（director）」の区別があるのですか？”

というのがあります。

こういう質問があるのは、日本のロータリークラブでは、役員が集まってクラブ運営について検討する「役員会（役員ミーティング）」が軽視されているからではないでしょうか。

確かに、ロータリー章典、国際ロータリー定款細則、標準クラブ定款、推奨クラブ細則のどれを読んでも、「理事会」についての記載はありますが、「役員会」については記載がありません。しかし、Guy Gundaker の主張する「充実したクラブ運営」を実現するには、役員が集まって検討するための「役員会（役員ミーティング）」は必要なのです。

ここでは、『A Talking Knowledge of Rotary』には書かれていませんが、「充実したクラブ運営」を実現するために必要な知識と方法について、私見を交えながら述べさせていただきます。

①役員と理事 ～～～

「役員会」は、クラブの執行機関です。したがって、「理事会」に諮る議案（各委員会の活動計画、予算、決算、新たな提案など）を事前に検討することが大きな役割です。

そして、それらの議案を役員会でまとめ、必要な資料と一緒に理事会へ提出するのが幹事の仕事です。言い換えれば、役員会の中心的役割を担うのは（会長ではなく）幹事なのです。日本のロータリーでは、こうしたプロセスが軽視されているような気がします。

一方、理事会はクラブの決議機関（意思決定機関）で、クラブ運営に関する全ての管理責任を担います。だからこそ、「理事会メンバーと規定された役員」がいて、議決にも参加するのです。なお、理事会の決議は多数決なので、理事会の議長である会長といえども、決議に拘束されます。

理事会は、役員会から提出された議案を検討した上で、決議（承認・不承認・各種決定）を行います。理事は、各々が担当する委員会によって審議に臨む心構えや立場は異なりますが、理事会では活発に議論をしてください。そうした心がけや切磋琢磨が、ロータリーに対する見識を深め合うことに繋がるからです。

年度開始前（特にPETS終了直後）の役員会と理事会は、例会プログラムの「年間スケジュール」を計画する上で極めて重要です。（→ P25参照）

もちろん、例会プログラムを実施するにあたっては、当該例会の前々月および前月の役員会と理事会も大切です。プログラムの詳細な準備について審議し、決定しなくてはなりません。（→ P25参照）

また、役員会や理事会では、クラブの問題点や改善策について話し合うことも忘れないでください。特に、例会に欠席者が多くなってきたら、その理由を検討することも必要です。（→ P27,29参照）

いずれにしても、魅力的で価値あるクラブ運営ができるかどうかは、会長や幹事をはじめとした理事会メンバーの心意気と責任感、ロータリーに対する認識の深さにかかっていると言ってもよいでしょう。

② 委員会 ～～～

③ クラブ会長 ～～～

④ クラブ幹事 ～～～

附記２ ロータリーのクラブ運営（寒河江ＲＣでの実践）

ここでは、私自身が寒河江ＲＣの会長時代（2009～2010 年）、下記の ＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞ の５項目を十分に踏まえながら、

「寒河江Ｃのクラブ運営において心がけたこと、実践したこと」

の幾つかを、具体的に述べさせていただきます。皆様の参考になれば幸いです。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の向上

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞

１）会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること

２）会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること

３）奉仕の心を涵養せしめること

４）自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること

５）優れた社会的指導者に育てること

第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第３．会員の同業者・業界全体の向上

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

先ず、私自身、クラブ会長として最も大切にしていた「信念」の１つは、

「会員一人一人の向上」こそが、会員数の増加に繋がる

であり、それだけに

「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実こそがクラブ活性化と会員増強の極意であり、クラブ会長の最大の責務である

と、肝に銘じておりました。

そのためにも、上記「第１．会員一人一人の向上」の １）にある

「会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がる」例会

を目指し、クラブ運営の重点目標として「会員スピーチの充実」を掲げたのです。具体的には、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回２名ずつ（１人 15 分間）の会員スピーチ例会を年間９回行いました。そして、各々の会員から、自らの生い立ち、事業経営上の体験（失敗談や成功談）、職業観、人生観、ロータリー観などを語ってもらいながら、会員間の敬愛の念とロータリー精神の高揚にも努めました。

これ以外にも、ロータリーに精通したベテランの会員から、毎月の「ロータリーの友」や「ガバナー月信」の解説、四大奉仕のクラブ・フォーラム例会や特別月間例会で基調講演をしていただくなど、会員が例会場の壇上でスピーチする機会を例年以上に増やしました。実際、私の会長年度の例会では、クラブ会員 50 名のほぼ全員が、壇上でのスピーチを経験したのです。

一方、ゲスト・スピーチ例会は年間 14 回です。そのスピーチの内容は、行政、教育、金融、芸術、マスコミ、ロータリーなど多岐にわたりましたが、ゲストの人選には十分に気を配りながら、上記「第1．会員一人一人の向上」の 2）にある

「会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させる」例会

を心がけました。

また、夜の例会は年間 11 回で、うち５回はクラブ・フォーラム、２回は家族例会です。もちろんどれも懇親会をセットして、ロータリー談義に花を咲かせ、ロータリーの志を高め深め合う例会を心がけました。

さて、上述したように、クラブ会長の最大の責務は「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実ですが、この４つの中で会長の専権事項と言えるのは、

「会長挨拶（会長スピーチ）」

だけです。これだけは会長にしかできませんし、会長が唯一の実行者であり、責任者です。

だからこそ、私は毎回の会長挨拶に「命をかける」思いと準備で取り組み、毎週、ロータリアンの矜持と喜びについて語り続けました。それだけに、私が最も嬉しかったことは、例会終了後の「今日の会長挨拶は、良かったね」や「心が洗われた思いだよ」などの、会員からの感想です。（← P29-30 参照）

会長挨拶は、時間がたてば忘れられてしまいます。しかし、上記のような感想があったということは、少なくともその時は、上記「第1．会員一人一人の向上」の 2）と 3）にある

「思考の広がりと向上心の喚起」や「奉仕の心の涵養」

に繋がったはずです。それを毎週続けたのですから、十分な成果が上がった一年間だったように思います。なお、その年度の小生の会長スピーチは 2800 地区のホームページに掲載してありますので、興味のある方はご覧ください。

（← 国際ロータリー第 2800 地区ＨＰ　ロータリーを学ぶ「資料６．会長スピーチの心得」参照）

また、「第1．会員一人一人の向上」５項目の 4）と 5）にある

クラブ会員の「自己発展」や「指導者としての成長」

については、入会数年以内の若い会員育成を主眼としたクラブ運営に力を入れました。なぜなら、それが若い会員の“質の強化”と“退会防止”、そして若い世代の“会員増加”にも繋がると信じていたからです。

その１つの方策として、理事会メンバーの「老・壮・青」のバランスに気を配りながら、私は敢えて入会３～４年目の若い会員５人を理事に抜擢し、各々に五大奉仕の委員長を兼務してもらいました。もちろん、力量を見抜いた上での人選です。また、彼らの担当委員会の副委員長は、面倒見が良くて、ロータリーの造詣も深いベテラン会員にやっていただきました。その上で、その副委員長と理事・役員の全員が１年間がっちりスクラムを組みながら、若い理事たちに思う存分の大活躍をしてもらったのです。

もちろん、経験不足から多少の失敗もありましたが、それも貴重な財産です。委員会活動にしても、若い感覚と押しの強さで、例年以上の盛り上がりと成果を得ることができました。

実は、寒河江ＲＣでは入会５～６年目で初めての理事を経験するのが慣例で、当初は早過ぎる就任に批判的な意見もありました。しかし、周囲からの助言や援助のおかげで、彼らの例会での報告や説明、計画や準備の確かさなどが次第に評価されるようになり、やがて批判の言葉を耳にすることはなくなりました。それは、彼らが地道にロータリーを学び、理解し、実践に繋げていった証拠でもあります。

五大奉仕の委員長を担った彼ら理事５人の活動内容についても、少し触れておきます。もちろん、どれもクラブ会員の汗と知恵を伴う、奉仕の喜びと使命感に満ちた事業ばかりです。

●青少年奉仕委員会

「心の強さと美しさ」をテーマに、市内小中学生の文集作りと表彰、観劇招待、市民討論会をセットした青少年奉仕事業。青少年奉仕フォーラムの主催。

●職業奉仕委員会

高校生の表現力ワークショップ、就職面接指導、職業講話、職場訪問をセットした職業奉仕事業。職業奉仕フォーラムの主催。

●国際奉委員会

台湾斗南 RC との友情交換（小中学生の短期留学、相互訪問）を主体とした国際奉仕事業。国際奉仕フォーラムの主催。

●社会奉仕委員会

市内公園２カ所の植栽、植樹、清掃、整備に関わる社会奉仕事業。社会奉仕フォーラムの主催。

●クラブ奉仕委員会

例会プログラムの計画と実施、例会場の設営、懇親会の準備と主催、ロータリーソング合唱、ロータリーの友の解説、ガバナー月信の解説、例会の出席記録や会報発行などのクラブ奉仕事業。クラブ奉仕フォーラムの主催。

こうして、入会３～４年目の若い理事５名は、１年間で大いに自信をつけ、大きく成長したのです。その後は、彼らは毎年のように理事や役員に引っ張りだこで、最近ではクラブ幹事や会長を任せられています。また、地区の委員長として活躍している人もいます。もちろん、彼らの友人・知人が次々と寒河江 RC に入会してきたことは、言うまでもないでしょう。

いずれにしても、「会員一人一人の向上」とは、Guy Gundaker の言う

「ロータリーの究極の目的は、素晴らしい真のロータリアンを育てること」

そのものです。私としては、特に若い有望な人材を育てることの重要性を強調したいと思います。なぜなら、それが会員増強に繋がり、クラブの活性化や発展にも繋がるからです。

それこそ『A Talking Knowledge of Rotary』をクラブ会長心得として駆け抜けた、実に多忙で楽しい、そして有意義な１年でした。何より嬉しかったのは、若い会員からの「ロータリーに入ってよかった」と、ベテラン会員からの「素晴らしい年度だった」という言葉です。

年度終了後の７月、テレビドラマ「Dr.コトー診療所」のロケ地、沖縄の与那国島で夫婦同伴の最終理事会を開催しました。もちろん旅費は本人持ちですが、大部分の理事夫妻が参加してくれました。そして、中高年夫婦らは、１年間の達成感と開放感の喜びで、日本最西端の夕日に向かってバイクで爆走したのです。あの時の夕日が、私には Guy Gundaker の笑顔に見えました。

おわりに

まさに今、新型コロナウイルスの流行で経済は逼迫し、社会も混乱しています。それだけに、「今は、ロータリーどころではない」と思っているロータリアンも少なくないかも知れません。また、新型コロナウイルスの流行が収束したとしても、人類は、これまでとは違った生活様式や考え方が求められるようになるかも知れません。しかし、それでも我々は、「ロータリアンとしての在るべき姿」、そして「人としての在るべき姿」を見失ってはならないのです。

いつの時代でも、経営者は 10 年後、20 年後の会社の「在るべき姿」より、今の状況を優先しがちです。社員のこと、家族のこと、顧客や取引先のことを考えれば、それは当然のことと判断する方もいるでしょう。

しかし、我々ロータリアンは「今さえ良ければいい」とか、「目の前の危機を乗り越えることが最優先だ」とか、「事業拡大と増益こそが我々の目標だ」とかの発想で、事業経営をすることはありません。常に過去を振り返り、常に未来を見据えながら、この目まぐるしい変転と混乱の現代においても、「経営者として、そしてリーダーとして自分は何をなすべきか」を熟慮してきたはずです。その上で、常に『真、善、美』に基づく崇高な理念に沿った正しい道を選択してきたのではないでしょうか。その選択は、自らの事業経営においても、ロータリーにおいても、もちろん人生においてもです。

その崇高な理念の１つこそ、「ロータリーの原点」とも言うべき Guy Gundaker の『A Talking Knowledge of Rotary』であると、私は信じてやみません。我々ロータリアンは、“Guy Gundaker のロータリー観”を旨とし、冷静な洞察、そして将来に誇れる（少なくとも恥じることのない）決断と覚悟を以て、自らの使命を果たしていかなくてはなりません。なぜなら、私達はロータリアンだからです。

1946 年のアメリカ映画『素晴らしき哉、人生！』は、「一人の誠実な人生は、仲間との友情を育み、多くの人を不幸から救い、様々な人に幸せをもたらすものだ」という内容の作品です。この映画を、1947 年に他界したロータリーの創立者 Paul Percy Harris も見たとすれば、自分が歩んできた人生の素晴らしさを振り返り、さぞ感動したことでしょう。しかも、この作品はアメリカ映画協会の「感動の映画ベスト 100」において、『街の灯』、『奇跡の人』、『ロッキー』などをおさえ、なんと第１位に輝いているのです。時代が移り変わっても、普遍の価値は燦然と輝き続けるということです。

いつの時代でも変わらない、いや変えてはならないロータリーの普遍の価値は、“Guy Gundaker のロータリー観”です。それを失えば、ロータリーは単なる「奉仕団体の１つ」に過ぎなくなります。
だからこそ、私が本解説書で皆様にお伝えしたかったことは、例え時代がどんなに移り変わろうとも

“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”　～ Guy Gundaker ～

と、誰からも称賛されるであろう“素晴らしい真のロータリアン”の姿であり、生き方です。

最後に―。本解説書を編集発行するにあたり、写真を提供してくださった米国議会図書館、貴重なご助言をくださった国際ロータリー日本事務局、そして多大なご協力をいただいた先輩ロータリアンの安孫子貞夫氏と齋藤榮助氏に心より感謝申し上げます。今さら言うまでもなく、私がロータリーに入会していなければ Guy Gundaker を知ることもなかったし、このお二人をはじめとした敬愛する数多くのロータリアンに出会うことすらなかったのです。もちろん、本解説書が世に出ることも、決してなかったはずです。

ロータリーの未来に幸あれ！

2020 年３月 31 日（初版発行にあたり）　鈴木 一作

ロータリークラブ

選ばれた地域リーダーが「親睦、学び、成長、奉仕」の場に集い、社会に貢献する世界的な団体

目的

- 奉仕の心の醸成と実践に邁進する“素晴らしい真のロータリアン”の育成
- 自分自身、事業、業界、そして社会全体の向上発展

特典

- 素晴らしい人との出会い、感動
- 純粋で心豊かな親睦（誠実と信頼と志に満ちた仲間）
- 職業上の価値ある啓発と発展
- 奉仕の心の醸成と昂揚
- 人間性の向上と飛躍の機会

義務

- 例会出席
- 会費納入
- ロータリー雑誌購読
- 求められれば応じ、役割を果たすべし（ロータリアンは、“イエス、はい、喜んで”）
- 素晴らしい真のロータリアンたるべし（高潔、寛容、親睦、学び、成長、奉仕）

～『A Talking Knowledge of Rotary』の原著巻末に掲載されている
「ロータリークラブ」の核心内容を、私の言葉で現代流に言い換えたもの～

Courtesy of the Library of Congress, Prints & Photographs Division, photograph by Harris & Ewing

ROTARY, ROTARIAN, SERVICE ABOVE SELF, MASTERBRAND SIGNATURE and MARK OF EXCELLENCE are registered trademarks of Rotary International. Rotary International was not involved with the publication of this book and the views expressed in this book do not reflect the views and opinions of Rotary International.

鈴 木 一 作（職業分類 眼科医） 1955 年 10 月 16 日生まれ

ロータリー歴

1994	寒河江ロータリークラブ 入会
2009～2010	寒河江ロータリークラブ 会長
2012～2015	国際ロータリー第 2800 地区 職業奉仕委員長
2015～2016	国際ロータリー第 2800 地区 ロータリー情報委員長
2017～2018	国際ロータリー第 2800 地区 ガバナー
2019～2020	国際ロータリー第 2800 地区 研修リーダー 国際ロータリー研修リーダー
2022～2024	ロータリーの友 副委員長、理事

職　歴

1988～1990	山形大学医学部眼科 助手
1990～1993	山形大学医学部眼科 講師
1993～	鈴木眼科 院長
2005～2021	山形大学医学部 非常勤講師

What is Rotary ？

～ Guy Gundaker から学ぶロータリー ～

2020 年3月1日　　初版 発行
2022年１２月25日　改訂５版 発行

著　者　鈴 木　一 作（寒河江ロータリークラブ）
協　力　安孫子 貞夫（寒河江ロータリークラブ）
　　齋 藤　榮 助（米沢中央ロータリークラブ）

＊本書は、2015 年５月８日以来、国際ロータリー
第 2800 地区ホームページ「ロータリーを学ぶ」に
改訂を続けながら掲載してきた内容をまとめたものである。
（http://www.rid2800.jp/）

Rotary
District 2800